

信州大学留学生センター年報

第3号

2001. 10 ~ 2002. 9



信州大学留学生センター

センターのさらなる発展に際して

留学生センター長 内 藤 哲 雄

年報第3号は、平成13年10月から平成14年9月までの事業活動報告書です。各種の事業は、一見すると例年通りの定型業務の繰り返しのように見えますが、需要に応じて臨機応変に企画推進することによって可能となったものです。報告書の作成は言わずもがな、それ以前の先生方の業務展開の労苦にこそ厚くお礼を申し上げます。

信州大学留学生センターは、「遠隔地に学部・大学院が分散する大学に必要な？」との疑念も聞こえる中でスタートしたのですが、三年有余の間に各種事業が着実に発展・定着し、今では、留学生の支援になくてはならない施設として全学から評価されるまでになりました。こうした発展は、留学生センターの専任教官や非常勤講師団の尽力だけでなく、全学のバックアップに支えられてなしたことです。衷心よりお礼を申し上げます。

留学生センターの年度別事業活動については、留学生センター年報の創刊号から本号までに詳しく述べられており、各種活動の評価については、昨年度発刊の『留学生センター自己点検・評価報告書』や本年報と同時期に発刊される『留学生センター外部評価報告書』にまとめられています。上記の各種報告書から窺えますように留学生センターの業務が拡充し安定するにつれて、研究者交流や大学（学部）間交流と連結して一元的に推進すべきだとの意見が出始め、平成14年12月には国際交流委員会において「国際交流センターの設置」が決定しました。平成16年度からの国立大学の独法化を視野に入れながら、信州大学の国際競争力強化を目指して、留学生交流、研究者交流、海外大学との交流に関しての事業を統合し、国際交流の拠点とするための機構整備が急がれます。

最後に、2期4年間にわたった留学生センター長の任務を間もなく終えるに際して、森本学長をはじめとして、歴代の学長・副学長や事務局長、関係各位のご支援に、心からのお礼を申し上げます。また、全学の要請に応えるべく全力で取り組んでこられた、留学生センターの専任教官や非常勤講師の皆様、留学生課の職員の皆様に感謝致します。留学生センターが国際交流センターとしてさらなる発展を続け、信州大学の国際競争力強化に貢献し続けることを切望して止みません。全学の教職員の皆様のさらなるご支援をお願い申し上げます、擲筆と致します。

平成15年3月17日

目 次

センターのさらなる発展に際して

目 次

信州大学留学生センター教職員と業務	1
◦ 信州大学留学生センター構成員	1
◦ 信州大学留学生センター研究・教育・学内委員会に係わる業務	1
全学各種委員会	1
出版・広報	2
授 業	2
交流・相談	2
学事・行事一覧	2
日本語教育	3
◦ 日本語研修コース	3
平成13年度後期	3
平成14年度前期	3
作文集	10
◦ 日本語・日本事情	14
日本語(表現中心)	14
日本事情 社会 2001後期	14
◦ 日本語補講	16
日本語補講 伊那地区初級	17
日本語補講 伊那地区中級	18
日本語補講「SUNS 中上級」	18
◦ 日韓共同理工系学部留学生事業予備教育	20
工学日本語物理及び物理演習	22
短期留学プログラム	24
相談・指導業務	25
活動記録	32
◦ 留学生と日本人のための公開セミナー	32
◦ 「留学生センターと国際交流の将来」についての懇談会	35
◦ 平成13年度後期～14年度前期信州大学留学生センター活動記録	43

交流事業 45

- 長野県留学生交流推進協議会 46
- 第12回留学生日本語スピーチコンテスト 46
- 『アジア賞』論文コンクール 46
- 信州の留学生に本を贈る会 46
- 留学生との交流会 46
- 恒例の日中友好キャンプとスキーで親睦深める 47

資 料 48

- 留学生数 49
 - 国別外国人留学生受入れ数 49
 - 外国人留学生受入れ数の推移 50
 - 外国人留学生年度別受入れ数の推移 51
 - 外国人留学生国別受入れ数の推移 52
- 交流協定締結大学一覧 52
 - 大学間協定 52
 - 各部間協定 52
- 日本語研修コース修了者 53
 - 第五期生 53
 - 第六期生 53
- 信州大学留学生センター教官業績一覧 54

信州大学留学生センター教職員と業務

○信州大学留学生センター構成員（平成14年9月30日現在）

センター長（兼任） （専任）	人文学部教授	内 藤 哲 雄
	教 授	高 石 道 明
（非常勤）	教 授	村 瀬 さな子
	教 授	藤 沢 文 人
	助教授	上 條 厚
	助教授	村 田 明
	助教授	佐 藤 友 則
	講 師	青 柳 にし紀（日本語研修コース担当）
	講 師	今 村 一 子（日本語研修コース担当）
	講 師	大 橋 敦 夫（日本語研修コース担当）
	講 師	金 子 泰 子（日本語研修コース担当）
	講 師	熊 崎 さとみ（日本語研修コース担当）
	講 師	合 津 美 穂（日本語研修コース担当）
	講 師	下 平 菜 穂（日本語研修コース担当）
	講 師	中 村 純 子（日本語研修コース担当）
	講 師	山 本 もと子（日本語研修コース担当）
	講 師	小 柴 善一郎（日韓共同理工系学部留学生コース担当）
	講 師	森 覚（日韓共同理工系学部留学生コース担当）
	講 師	川 崎 貴 史（日韓共同理工系学部留学生コース担当）
	講 師	張 光 玄（日韓共同理工系学部留学生コース担当）
	講 師	高 石 久美子（日本語補講担当）
	講 師	村 山 啓 子（日本語補講担当）
	講 師	村 田 満見子（日本語補講担当）

事務担当

学生部留学生課	留学生課長	平 野 春 吉
	留学生係長	藤 本 哲 生
	留学生係	山 田 アカネ
	留学生センター係長	林 實

○信州大学留学生センター研究・教育・学内委員会に係わる業務

全学各種委員会

学内共同教育研究施設等管理委員会

内 藤 哲 雄
高 石 道 明

留学生センター運営委員会

村 瀬 さな子
内 藤 哲 雄
高 石 道 明
村 瀬 さな子
藤 沢 文 人
上 條 厚
村 田 明

自己点検評価委員会

佐 藤 友 則
内 藤 哲 雄

自己点検評価委員会授業評価専門部会	佐 藤 友 則
防災安全委員会	内 藤 哲 雄
国際交流委員会	内 藤 哲 雄
学術研究推進委員会	内 藤 哲 雄
情報処理センター情報システム運営委員会	村 田 明
セクハラ相談員	村 瀬 さな子
学生生活調査委員会	村 瀬 さな子
評議会・部局長会議	平 野 春 吉

○出版・広報

留学生センター紀要	上 條 厚
	村 田 明
留学生センター年報	村 田 明
	佐 藤 友 則
留学生センターニュース	上 條 厚
パンフレット	上 條 厚
相談ハンドブック	村 瀬 さな子
外国人留学生の手引き	上 條 厚
ホームページ	佐 藤 友 則
	村 田 明

○授 業

日本語研修コース	佐 藤 友 則
日本語・日本事情	上 條 厚
日本語補講	上 條 厚
遠隔地教育システム利用日本語補講	佐 藤 友 則
日韓共同理工系学部留学生予備教育	上 條 厚
短期留学プログラム	村 田 明

○交流・相談

留学生担当教官連絡会	村 瀬 さな子
相談業務	村 瀬 さな子
留学送り出し相談	佐 藤 友 則
地域交流事業	佐 藤 友 則
国際理解セミナー	村 田 明

○学事（行事）一覧

村 田 明

○評価・点検

自己円件・評価	村 瀬 さな子
外部評価	村 瀬 さな子

○臨時業務

学長裁量経費	高 石 道 明
	村 田 明

日 本 語 教 育

日本語研修コース

○平成13年後期(第5期)日本語研修コース

[期 間] 平成13年10月～14年3月

[学習者] 8名

中 国 研究生	信州大学医学研究科進学	男性
中 国 研究生	信州大学医学研究科進学	女性
中 国 研究生	信州大学医学研究科進学	女性
中 国 研究生	信州大学医学研究科進学	女性
中 国 研究生	平成14年6月帰国	男性
モンゴル 研究生	信州大学教育学研究科進学予定	男性
中 国 大学院生	信州大学教育学研究科在籍	男性
中 国 研究員	信州大学医学研究科在籍	男性
中 国 研究員	信州大学医学研究科在籍	女性

この期には、文部科学省からの大学院予備教育生の配属はなく、信州大学医学研究科の研究生、研究員を中心とした構成であった。モンゴルの1名を除き、漢字圏の学習者だったこと、8名中2名のみが文系の研究科所属であったことで、変則的なクラス形態となった。

[コース(週予定)] 2クラス

Aクラス（初級学習者対象）2名

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①	復 習①
2	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②	復 習②
3	発音+聴解	Project Work	日本事情	読 解 (理系向け)	漢 字 (理系向け)
4	×	Project Work	×	Tutorial	Tutorial

1コマ+2コマ 9:30～12:30（休憩は適宜1回または5回）

3コマ 13:30～15:00

4コマ 15:10～16:40

(主 教 材)

主教材として『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』を使用した。2名とも多少の学習経験はあったため、『みんなの日本語』の12課までは復習中心に早く進め、13課から1日1課のペースで進めた。『みんなの日本語』修了後は、『新日本語の中級』の1,7,8,10,11課を2日に1課のペースで指導した。理解は問題なかったが、口頭表現能力には問題が見られた。

(Project Work)

この学期より、週1回2コマ連続、2クラス合同の形式でProject Workが行われるようになった。このクラスは、通常の教室内での教師対学習者という形式をはなれ、学習者が様々なプロジェクトを

遂行していく過程で日本語を用い、より応用力・コミュニケーション能力を持った学習者を養成することを目的としたものである。この学期以前にも、学期内に不定期でこのようなプロジェクトが行われてきたが、それを週1回に固定し、2クラス合同で行うようにした点が大きな変化と言える。学習者主体の積極的な活動になったこと、日本語でのやりとりが増えたこと、作業も多いが達成感が大きく、学習者から高く評価されたことなどで、この変化は成功であったと言えよう。

以下にプロジェクトの実施内容をあげる。

10月16日	買い物とカタカナ・タスク
10月23日	松本街歩き
10月30日	街歩き作文①+日本人と話そう①
11月6日	日本人と話そう②+街歩き作文②
11月13日	好きなもの紹介①
11月20日	好きなもの紹介②
11月27日	日本の伝統文化体験（華道+茶道）
12月4日	おしゃべりパーティー準備①
12月11日	おしゃべりパーティー準備② →14日に実施
12月18日	年賀状作成+修了発表準備①
1月15日	インタビュープロジェクト準備
1月23日～28日	インタビュープロジェクト実施+発表準備
1月29日	インタビュープロジェクト発表
2月5日	文集作成プロジェクト①
2月12日	文集作成プロジェクト②
2月18日～25日	修了発表準備②
2月26日	修了発表

（発音+聴解）

自己モニターを用いた発音指導を、2クラス合同で50分ほど行い、その後2つのクラスに別れて聴解指導を行った。発音指導には『みんなの日本語』の会話文を用いた。会話文を録音してから、学習者自身が自分の発話を聞き、問題点があるか、どんな問題点かをチェックさせるという方法で行った。聴解は『楽しく聞こうⅠ』を用いた。

（日本事情）

朝日小学生新聞やビデオなどを用い、日本に関する知識を増やすこと、自由に日本語を使って話し合わせることを、聴解能力を養成することを目的として行われた。

（読 解）

最初に『初級で読めるトピック25』で指導し、次に『読みへの挑戦』を用いて指導した。トピックにとりあげられた内容かを読むことからさらに話を広げて、日本事情的な話題にまでふみこんで授業を行った。

（漢字教材・理系向け）

『Basic Kanji Book vol.1』を用いて、医学の語彙を中心に指導した。理系、特に医学の論文は英語で書かれたものが多いため、漢字のニーズはそれほど高くなかった。

（復 習）

主教材で指導した文法・文型の復習をしつつ、使えることを目的にした練習を行った。

（テ ス ト）

3回の月例テスト+修了テストの形式で行った。月例テストでは、その1ヶ月分の文法テスト、漢

字テスト、そして会話テスト（ロールプレイ形式）を行った。また、修了テストでは、全学習項目を対象にした文法、漢字、会話の3テストをした。

(Tutorial)

学習者1名に教師1名がついて、指導を行った。指導内容は、学習者と相談のうえ、決定されたため、それぞれ異なる。最後の修了発表の準備なども行うようにした。

Bクラス（初中級学習者対象）6名

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①	復習①
2	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②	復習②
3	発音+聴解	Project Work	作文	読解	漢字 (文系向け)
4	×	Project Work	×	Tutorial	Tutorial

(主教材)

全て既習の学習者だったため、最初の1週間は『みんなの日本語 標準問題集』を用いて復習をしつつ学習者の能力を測り、2週目以降は『みんなの日本語』26課より1日1課のペースで学習を進めた。修了後は『新日本語の中級』の1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9課を2日に1課のペースで指導した。

(作文)

『表現テーマ別 にほんご作文の方法』を用いて論文指導を行った。授業中は、話す練習のために、会話もしつつ論文の技術を指導し、宿題として書いて提出させるようにした。

(読解)

星新一の『ショートショート』や新聞の切抜きで読解の練習をしつつ、ドラマのビデオを用いて、どれだけ内容が理解できるかという練習も行った。

(漢字)

『Intermediate Kanji Book vol.1』を用いて、訓読みを中心に指導した。

(テスト)

Aクラス同様、3回の月例テストと1回の修了テストを行った。

[コース(学期予定)]

10月初旬	学習者の受け入れ
10月9日～10日	オリエンテーション
10月12日	開講式
10月15日	授業開始
11月12日	11月 月例テスト
12月21日	12月 月例テスト
12月22日～1月13日	冬休み
1月12日	1月 月例テスト
2月15日	修了テスト
2月26日	修了発表会
3月8日	研修旅行（飛騨高山へ）
3月11日	修了式

(受け入れ)

今学期は、文部科学省派遣の留学生がいなかったため、松本駅への出迎え・市役所での書類作成などの作業は行わなかった。

(評価)

学習者の最終評価は、このコースに関わった専任教官が判定会議を開いて行った。評価対象としたのは、各テスト結果と、通常の授業・生活面での日本語能力である。評価は、「通常のコミュニケーション能力」などの4項目それぞれにおいて、A～Dの四段階で行い、その評価結果は、コメントをつけて進学先の指導教官へ連絡した。

(発表会)

これまでの学期同様に修了発表会を行い、それをもって研修コースでの学習を全て修了とした。発表内容は「自分の専門分野の紹介」および「自国紹介」だったが、今学期は中国からの学習者が多かったため、同様の発表内容にならないよう、事前に学習者同士で打ち合わせを行い、発表内容を検討した。発表の持ち時間はそれぞれ20分で、スライドを活用して発表した。会場は旭会館3階の大会議室で、日本人・留学生の聴衆は30名ほどであった。

(研修旅行)

研修旅行は、大学院受験などの日程を考慮した上、学習者同士で話し合って日時・場所を決定した。そして、教官2名を交えて、飛騨高山へバスで日帰り旅行を行った。

○平成14年前期(祭6期)日本語研修コース

[期 間] 平成14年4月～14年9月

[学習者] 11名

ポルトガル	研究生	信州大学繊維学研究科進学予定	男性
中 国	研究生	信州大学医学研究科進学予定	男性
中 国	研究生	信州大学医学研究科進学予定	男性
中 国	大学院生	信州大学医学研究科在籍	女性
中 国	大学院生	信州大学医学研究科在籍	女性
ド イ ツ	交換留学生	平成14年9月帰国	女性
韓 国	交換留学生	信州大学人文学部在籍	女性
韓 国	交換留学生	信州大学人文学部在籍	女性
韓 国	交換留学生	信州大学人文学部在籍	女性
韓 国	交換留学生	信州大学人文学部在籍	女性
韓 国	交換留学生	信州大学人文学部在籍	男性

[コース(過予定)] 2クラス

Aクラス(初級学習者対象) 5名

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①
2	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②
3	発音+聴解	Project Work	漢 字 (非漢字圏)	読解+作文	漢 字 (非漢字圏)
4	×	Project Work	×	Tutorial	Tutorial

1コマ+2コマ 9:30～12:30(休憩は適宜1回または2回)

3コマ 13:30～15:00

4 コマ 15:10～16:40

(主 教 材)

多少既習の学習者もいたが、全くの未習者もいたため、その学習者に合わせ、ひらがな・カタカナの指導から始めた。主教材として『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』を使用し、1日1課のペースで進んで、コース修了直前に全てを終えた。

(Project Work)

平成13年度後期同様、週1回に固定してProject Workを行った。活動内容は以下の通りである。

4月16日	買い物とカタカナ・タスク
4月23日	松本街歩き準備 →26日に実施
5月7日	日本人と話そう①
5月14日	日本人と話そう②
5月21日	好きなもの紹介①
5月28日	好きなもの紹介②
6月4日	日本の伝統文化体験（華道＋茶道）
6月11日	おしゃべりパーティー準備①
6月18日	おしゃべりパーティー準備② →28日に実施
7月2日	暑中見舞い作成・七夕の短冊作成
7月9日	インタビュープロジェクト準備
7月15日～18日	インタビュープロジェクト実施＋発表準備
7月19日	インタビュープロジェクト発表
7月23日	インタビュー発表のフィードバック
7月30日	文集作成プロジェクト①
9月3日	文集作成プロジェクト②
9月10日～17日	修了発表準備
9月30日	修了発表

(発音＋聴解)

平成13年度後期同様、自己モニターを用いながら発音指導を行い、その後、隔週で聴解指導を行った。聴解教材は『楽しく聞こうⅠ』を利用した。

(漢 字)

非漢字圏の学習者を対象に、『Basic Kanji Book vol.1』を用いて漢字の指導を行った。

(読解＋作文)

『みんなの日本語初級 初級で読むトピック25』を用い、日本語の文章に慣れさせ、日記や簡単なまとめなどの作文指導も行った。

(復 習)

主教材で指導した文法・文型の復習をしつつ、使えることを目的にした練習を行った。

(テ ス ト)

3回の月例テストおよびコース修了時の修了テストを実施した。試験科目は、文法、漢字、会話の3つである。

(Tutorial)

学習者1名に教師1名がついて、学習者と相談のうえ、指導を行った。

Bクラス（上級学習者対象） 4名+学部授業参加2名

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①
2	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②
3	発音+聴解	Project Work	日本事情	作文	漢字 (漢字圏)
4	×	Project Work	×	Tutorial	Tutorial

（主教材）

学習者が全て中級レベル以上であったため、『みんなの日本語』は使用せず、『新日本語の中級』を2日に1課ずつ指導した。『新日本語の中級』修了後、週に2日はビデオなどを見てから討論する授業、週3日は『留学生の日本語 読解編』を用い、読む技術・文法を指導する授業を行った。なお、当初はBクラスにいた2名については、より有効に日本での学習を進めさせるために、2週目以降は学部1年の留学生と同様の授業を受講させることにした。ただし、Project Workとチュートリアルは他の研修生と同様に受講していた。

（発音+聴解）

Aクラス同様の方法で発音と聴解の指導を行った。聴解教材は、『楽しく聞こうⅡ』またはラジオ番組の録音などを利用した。ただし、日本語能力試験1級を合格している上級の学習者3名には、発音・聴解指導を行わず、ビデオを見ながら討論・作文する授業を行った。

（日本事情）

『朝日小学生新聞』などを利用し、日本での生活に役立つ知識習得を目指した。

（作文）

『日本語作文ⅠおよびⅡ』を用い、書く練習を積むことで、正確かつ適切な文章を書けることを目的として授業を行った。また、手紙の書き方等も指導した。

（漢字）

漢字圏の学習者を対象に、訓読みを中心に漢字を指導した。

（テスト）

Aクラス同様、3回の月例テストと1回の修了テストを行った。

[コース(学期予定)]

4月初旬	学習者の受け入れ
4月8日～10日	オリエンテーション
4月12日	開講式
4月15日	授業開始
5月30日	5月 月例テスト（Aクラス）
6月26日	6月 月例テスト（Aクラス）
8月2日	8月 月例テスト（Aクラス）
8月3日～9月1日	夏休み
9月9日	修了テスト
9月18日	発表会
9月20日	研修旅行（富士五湖へ）
9月24日	修了式

(受け入れ)

文部科学省派遣のポルトガルの留学生が松本駅に到着する日時の連絡を受け、センター教官が車で駅まで迎えに行った。その後、ホームセンターで布団を購入し、大学の留学生課で諸手続を行い、国際交流会館に連れて行って会館での注意事項を説明した。

(評価)

このコースに関わった専任教官が判定会議を開いて修了判定を行うと同時に、この学期から、それぞれの科目の成績をつけて成績証明書を発行するようになった。科目は「文法・会話」「プロジェクト・ワーク」「漢字B」などがあり、それぞれの科目について担当した教官(非常勤講師も含む)が100点満点で成績をつけた。その後、学習者毎に受講した科目名とその成績を記入した成績証明書を発行した。

(発表会)

「自分の専門」+「自国紹介」という方針で準備を進めさせたが、中国と韓国の学習者が多いため、「自国紹介」は行わず、「自国の文化紹介（昔話など）」などを行った学習者もいた。また、交換留学生の専門分野は日本語であるため、他に興味を持っている分野について発表していいとした。「韓国の映画」「宮崎駿」などを選んだ学習者がいた。どの学習者も非常に熱心に発表した結果、持ち時間の20分を超え、発表時間が長すぎる会となった。会場は、信州大学共通教育24番教室で、参加者は25名ほどであった。

(研修旅行)

研修旅行は、教官2名を交えて、富士五湖へバスで行った。どこに行くかについても、Project Work の時間に、希望の場所の登録→選挙という方法で決定した。

(佐藤友則)

2001年後期日本語研修コース

女鳥羽川の思い出



信州大学留学生センター
日本語研修コース「プロジェクトワーク」クラス

目次

はじめに……………下平菜穂 1

◆先生方から一言日本語研修コース担当教員11名

みんなを教えた感想……………佐藤友則	2
授業の感想……………今村一子	2
女鳥羽川……………村田 明	3
「贈る言葉」……………合津美穂	3
第5期の日本語研修コース、研修生に接して	
……………中村純子	4
みんな違って、みんなステキ!…金子泰子	4
3点測量に向けて……………大橋敦夫	5
研修コースを終えて……………青柳にし紀	5
まとまって活動した君たちへ……………上條 厚	6
大人のクラス……………下平菜穂	6
大地の人々……………村瀬さな子	7

◆松本街歩きの作文ほか

松本街歩き	
—いろいろなことをした—……………閤 会敏	8
三郷の旅……………賈 黎静	10
松本街歩き —四柱神社—……………張 超	11
日本の交通について	
—松本を歩いて思ったこと—……………張 森	13

松本街歩き —面白かった日—…都 鎮宇 15

松本街歩き
—美味しかった軽食—……………杜 豊 17

松本街歩き
—楽しかった1日—……………任 国山 19

私が住んでいた家
……………バトツェンゲノレ・ダナー 21

松本街歩
—日本と申国の違い—……………李 海波 22

◆私の大切なもの紹介ほか

息子の写真……………李 海波	24
私の好きなもの…バトツェンゲル・ダナー	25
私の得意なこと —太極拳—……………任 国山	27
大事なもの —私の家族—……………杜 豊	28
私の趣味……………都 鎮宇	29
出身大学……………張 森	31
海……………張 超	32
おしゃべりパーティー……………賈 黎静	34
私の大切な人 —私の息子—……………閤 会敏	36
おしゃべりパーティーの招待状	
……………杜 豊/李 海波	37
……………任 国山/張 森	38

◆日本人の意欲調査報告書

緒婚についてインタビュー……………都 鎮宇	39
日本人の留学に関する意識……………張 森	42

◆調査の結果についての原稿

—携帯電話について—……………杜 豊	46
卒業したらどんな仕事をしたいですか?	
……………張 超	49
中国についてどのくらい知っていますか	
……………任 国山	53
男女の役割について……………賈 黎静	55
日本人の意識調査 —スポーツについて—	
……………バトツェンゲノレ・ダナー	57
日本人の意識についてのアンケート調査の原稿	
—食生活について—……………閤 会敏	59
アンケート調査報告 —進路について—	
……………李 海波	62
おわりに —後期—	
…日本語研修コースの学生一同	65

はじめに……………下 平 菜 穂

この冊子は、2001年度後期日本語研修コースの文集です。後期の研修コースは、2001年10月、任さん、李さん、閻さん、都さん、杜さん、張超さん、張淼さんの7人でスタートしました。みんな明るく笑顔が絶えないクラスです。すぐにバトさんが入って8人になり、それから賈さんも加わって、とてもパワフルで楽しい9人のクラスになりました。

プロジェクト・ワークの時間には、全員が一つのクラスとして様々な活動をしてきました。松本の街を歩いたり、人文学部の日本人学生と話したり、「好きなもの／大事なもの」を紹介し合ったり。

「おしゃべりパーティー」では、企画、お客様の招待、パーティーの準備、司会、挨拶など、学生が自分たちで行い、盛大なパーティーを成功させました。「日本人の意識調査」では、学内でたくさんの人に声をかけてアンケート調査を行い、面白い結果を得ることができました。

ここに収められているのは、そういった活動の中で書いた作文や招待状、発表原稿、調査報告などを清書したものです。もちろんワープロソフトへの入力も自分たちで行いました。日本語入力にもだいぶ慣れてきたと思います。

この文集が、コースの参加者にとって一緒に学んだ仲間や教師を思い出させる大切な思い出の品となることを、そして、読者の皆さんにとって面白い読み物となることを願っています。

私が住んでいた家……………バトツェンゲル・ダナー

私が子供のとき住んでいた家は、今もとても懐かしくてそのころのことを思い出したらその時代の、生活、にもどりたくなるような気がする。

私は十八歳までゲルと言うモンゴルの家に住んでいた。昔の伝統的なモンゴルの家は、モンゴルの気候や自然や生活状態ととても関係がある。そとから見れば、白色で丸い形で、戸はいつも南向きでなければいけない。

一年の間、季節によって四回引っ越さなければならない。ゲルはたてるのととりこわして運ぶのが便利なのだ。ゲルで生活している時、いつも外で遊んで過ごしたことをわすれられない。ゲルの横につないである馬に乗って草原を疾駆したことは、今でも心の中に残っている。大草原にたっているゲルを見たら、人間が作ったものとは思えなくて、自然からできたもののような感じがする。

私は、田舎から都市に引っ越したとき、都市の生活はいつも同じことの繰り返しで、寂しかった。

私には大草原での生活しか幸せはありません。

**私は、2002年に
彼らがしたことを知っているっ!!!**



信州大学留学生センター
日本語研修コース<プロジェクトワーク>

目次

始めの挨拶……………李 賢珠(韓国)	1	私が好きな歌手、キム・グンソク ……………全 東園(韓国)	17
◆先生方からの一言		おしゃべりパーティーの招待状……………	19
11名の学生たちとのプロジェクトワーク ……………金子泰子	2	◆日本人の意識調査報告書	
勉強は成果はどうでした?……………佐藤友則	3	「日本女性の結婚観」……………衛 俊萍(中国)	20
◆松本街歩きの作文		日本人の大学生の留学観……………趙 旭(中国)	24
とても楽しい日 ……………マリオン・ガンサー(ドイツ)	4	日中女性の恋愛観比較……………張 合林(中国)	29
松本街歩き報告書……………パウロ(ポルトガル)	5	日本女性の職業観……………戴 軍(中国)	34
中町通りとナワテ通りの見学 ……………趙 旭(中国)	6	EUに関するアンケート ……………パウロ(ポルトガル)	38
面白い日……………戴 軍(中国)	7	日本の大学生が知っている韓国 ……………李 民慶(韓国)	41
◆私の好きなもの紹介		関東と関西の面白い違い……………李 賢珠(韓国)	46
私の好きなもの-F 1 ……………マリオン・ガンサー(ドイツ)	8	日本における20代の大学生の美容整形に 対する意識調査……………李 喜眞(韓国)	49
私の娘一枚?……………張 合林(中国)	9	日本の大学生の海外旅行……………金 知垠(韓国)	55
私の大切な辞書……………趙 旭(中国)	12	日本の若者の食習慣 ……………マリオン・ガンサー(ドイツ)	59
私の好きなもの紹介……………戴 軍(中国)	13	◆日本人学生たちから	
私のウォークマンとMD……………李 民慶(韓国)	14	留学生のみなさんへ ……………平野涼子・溝井益美・三間美奈子	63
私のマニュアルカメラ……………金 知垠(韓国)	16	「本音と建前」について ……………平野涼子・溝井益美・三間美奈子	64
		◆その他	
		韓国語と日本語の中で使われている外来語 ……………李 賢珠(韓国)	67
		宮崎駿の作品について……………李 喜眞(韓国)	72
		韓国の青年にとって軍隊が意味するもの ……………全 東園(韓国)	77
		詩-「お互いに」……………李 民慶(韓国)	81
		私にとっての写真の意味……………金 知垠(韓国)	82
		おわりに……………金 知垠(韓国)	83

始めの挨拶.....李 賢 珠

2002年4月に始まった日本語研修コースの文集をPROJECTWORKクラスで作ることになりました。みんな自分なりの夢を持って研修室1番で会ったことがまるで昨日のここのようなのに、もう研修コースが終了する時期になってしまいました。

2002年度前期のいきいきしたメンバーの中では、一番人数の割合が多かったのは全東園さん、李喜眞さん、李民慶さん、金知垠さん、私(李賢珠)5人の韓国人でした。その次は張合林さん、衛俊萍さん、趙旭さん、戴軍さんの四人の中国人でした。そこにドイツのマリオンさん、ポルトガルのパウロさんがいて、みんなで11名でした。

普通は初級のAクラスと中級のBクラスに分けて授業が行われていましたが、PROJECTWORKの授業だけは、初級・中級のみなが集まって、一緒にできてよかったと思います。特に、PROJECTWORKは他の授業とは違って、実際に自分がやってみて経験することが重要だったし、一人だけではなく、みんなで協力することが多かったので、その仕事がかきつけでお互いに親しくなったと思います。

研修コースの勉強も本当に面白かったです。ヨーロッパの人とアジアの人が日本の松本にある信州大学で会って、一緒に勉強をしたり、買い物をしたり、パーティーをしたり、いろいろな国の人という経験ができて本当に嬉しかったです。

2002年度前期のすばらしい思い出を作る機会ができてよかったと思います。文集の題目のように2002年度前期でしたことを忘れないように大切にしまっておいてほしいです。

最後に、お世話になった高石先生、上條先生、村田先生、佐藤先生、金子先生、青柳先生、山本先生、下平先生、村瀬先生、中村先生、合津先生、熊崎先生、今村先生に心から感謝のお言葉を申し上げます。

松本街歩き報告書.....パ ウ ロ

松本市は、今、大きく改造されているように思います。女鳥羽川の両岸には、たくさんの新しい、そして広い店やサービス部門の建物などが次々と建っています。

私は、街の中にある小さい公園や神社が好きです。そこでリラックスすることができるし、都市の騒音が遠くにあるように感じます。

私は、松本の街には、小さくて、古い、そして伝統的な店が維持されていて面白いと思いました。古いものを街中に維持していくのはとても難しいと思います。

松本市は、今、急速に開発されている都市ですが、その伝統と文化を忘れていないと思います。

日本語・日本事情

日本語・日本事情の授業の平成13年度については、昨年度・一昨年度と変化なく行われた。開設された授業は次のとおりである。

日本語（読解中心）Ⅰ	（前期・1単位。2コマ上條厚担当）
日本語（読解中心）Ⅱ	（後期・1単位。2コマ上條厚担当）
日本語（表現中心）Ⅰ	（前期・1単位。1コマ上條厚担当・2コマ佐藤友則担当）
日本語（表現中心）Ⅱ	（後期・1単位。1コマ上條厚担当・2コマ佐藤友則担当）
日本事情（社会と人間（基礎））	（前期・2単位。村田明担当）
日本事情（社会と人間（応用））	（後期・2単位。村田明担当）
日本事情（日本の文化Ⅰ）	（前期・2単位。村田明担当）
日本事情（日本の文化Ⅱ）	（後期・2単位。村田明担当）
日本事情（自然環境と人間）	（前期・2単位。上條厚担当）
日本事情（長野県自然環境と人間）	（後期・2単位。上條厚担当）

日本語の授業はそれぞれ2コマまたは3コマ開設されているが、学生はそれぞれの授業について、1コマのみを受講する。日本事情はすべて1コマずつの開講である。

これらは皆、学部共通教育の授業である。学生は最大16単位まで取得でき、その単位を外国語科目および主題別科目に振り替えることができるが、その扱いは学部・学科により異なっている。

今回は、例年と変化なく行われたことの報告のみに留どめる。（上條 厚）

日本語（表現中心）

平成13年度前期は、『論文ワークブック』（くろしお出版）、『にはんご作文の方法』（第三書房）などをもとに、平成12年度に作成したハンドアウトを修正使用して授業を行った。前半は、論文で用いられる表現・語彙の導入と練習、後半は論文の構成を指導した。前期の評価は、学期末の2,000字の論文と出席率、授業での理解度、宿題の提出率によって行った。

後期は、11月に行われる松本東ロータリークラブ主催のスピーチコンテストに焦点を定め、スピーチ原稿の作成とスピーチの仕方を指導した。コンテストの参加は自主的に行わせた。スピーチ終了後は論文指導に戻り、前期の復習と、誤った論文表現の修正練習などを行った。最後に、スライドを用いたプレゼンテーションの指導を行い、模擬発表をしたうえで、プレゼンテーションの注意点などを指導した。

評価は、宿題の提出率と内容および出席率をもとに行った。（佐藤友則）

日本事情 社会 2001後期

留学生のための日本事情紹介という観点からさまざまな日本事情に関する話題を提供し、受講生にその話題についての意見をまとめさせた。今期提供した話題は次のとおりである。

- ・交通事故を起こしたとき
- ・就職に向けて
- ・給料をどうします
- ・心の豊かさをもとめて
- ・サラリーマンはつらいかも、でも・・・
- ・円高はいやですね
- ・物価は上がるしかないのかな
- ・都市事情
- ・天皇制について

「物価は上がるしかないのかな」では、需要と供給のバランスや円高・円安などで物価がどのように変動するかを説明してから、次の課題を与えて作文をさせた。

課題 日本は世界でも物価が非常に高い国だと言われている。日本で物価が高いのはなぜか、思いつくことを述べよ。

作文例

日本は世界でも物価が非常に高い国だと言われています。その理由について私は次のように考えています。

商品の価格は、それを売るための費用と需給関係が基本になって決まっていて、商品の品質はよければよいほど高く売れます。日本製品の品質は世界中でよいといわれています。それだけではなく、品質が同じでも、需要量と供給量によっても商品の価格は違ってきます。

また、円高・円安も物価に影響を与えます。円安になると輸入品の価格が上がります。

(工学部1年中国)

日本にくる前に、日本の物価は非常に高いと聞いた。特に東京は世界の大都市の中で一番物価が高いといわれている。日本にきて自分の目で見て、納得した。その原因を次のように考える。まず、日本の面積が小さいことだ。農業用地は有限であり、農産物量も限られてくる。二つ目の原因は、日本の労働力の価値が高いことだ。商品の価値は、原料だけでなく、労働力の価値も含んでいる。

(経済学部1年中国)

模範作文のようなものを用意しておき、提出された作文はすべて添削して、用意した作文とともに返却する。この話題では、大和総研が出版した『入門の入門 経済のしくみ』に日本における物価事情についてのわかりやすい解説があったので、それを紹介した。また、独創的な意見や多かった意見をまとめたものを作成し議論を発展させる参考とした。たとえば、物価が高くなる原因として、日本の人件費が高いからという意見が多かった。この意見に基づき、留学生の出身国における平均賃金と比較させ、それぞれの国の生活水準や、学生本人が求める生活水準などへと議論を発展させた。

(村田 明)

日 本 語 補 講

日本語補講は平成13年度、次のように行われた。

◆松本地区

初級 前期 水 16:20~17:50 金 13:00~14:30 村田明担当
後期 月 14:40~16:10 木 14:40~16:10 村田満見子担当
主教材:『みんなの日本語Ⅰ』 その他
副教材:ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』
『わくわく文法リスニング』
『絵入り作文入門』

常時出席人数 4

中級 前期 月 16:20~17:50 木 16:20~17:50 村田 明担当
後期 水 16:20~17:50 金 14:40~16:10 上條 厚担当
主教材:『日本語中級Ⅰ501』
『中日交流標準日本語』 その他
副教材:ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』
『みんなの日本語Ⅰ』
『みんなの日本語Ⅱ』

常時出席人数 2

◆長野地区

初級 前期 火 10:00~12:00 金 10:00~12:00 今村一子担当
後期 火 10:00~12:00 青柳にし紀担当 金 10:00~12:00 今村一子担当
主教材:『みんなの日本語Ⅰ』
副教材:『新文化初級日本語Ⅰ』
『よくわかる日本語』
『みんなの日本語 標準問題集』
『ヤンさんと日本の人々』『たのしく聞こう』

常時出席人数 6

中級 前期 月 14:00~16:00 金 14:00~16:00 合津美穂担当
後期 火 14:00~16:00 青柳にし紀担当 金 14:00~16:00 合津美穂担当
主教材:『BASIC KANJI BOOK vol.2』
『日本語作文の方法』
『テーマ別 中級からはじめる日本語』

常時出席人数 6

◆伊那地区

初級 前期・後期 月 13:00~15:00 山本もと子担当
金 13:30~15:30 高石久美子担当
主教材:『新文化初級日本語Ⅰ』 凡人社
副教材:ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』 NHK
『毎日の聞き取り50日 上・下 初級編』 凡人社
『にほんごくあいうえお>』 凡人社
『スーパーキット』『スーパーキット2』 アルク

常時出席人数 9

中級 前期・後期 月 10:00～12:00 山本もと子担当

金 11:00～13:00 高石久美子担当

主教材:『新文化初級日本語Ⅱ』凡人社

副教材:ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』NHK

『毎日の聞き取り50日 上・下』凡人社

『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』凡人社

『絵入り日本語作文入門』専門教育出版

『楽しく読もうⅡ』凡人社

『初級で読めるトピック25』スリーエーネットワーク

『スーパーキット』『スーパーキット2』アルク

常時出席人数 12

◆上田地区

初級 前期・後期 火 10:00～12:00 木 10:00～12:00 村山啓子 担当

主教材:『みんなの日本語Ⅰ』

『みんなの日本語Ⅱ』

副教材:『毎日の聞き取り50日』

ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』

『クラス活動集 練習C』

『会話イラストシート』

『書いて覚える文型練習帳 標準問題集Ⅱ』

常時出席人数 10

中級 前期・後期 火 13:00～15:00 木 13:00～15:00 村山啓子担当

主教材:『みんなの日本語Ⅱ』

『中級の日本語』

副教材:『毎日の聞き取り50日』

ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』

『クラス活動集 練習C』

『会話イラストシート』

『書いて覚える文型練習帳 標準問題集Ⅱ』

常時出席人数 3

伊那地区の担当は上記のとおり、年間を通して2人で1つのクラスを持つようにした。お互いに連絡を取りながら行った。長野地区は担当者の入院という事情があったために、当初の予定を急に変え、担当が複雑となったが、特に混乱はなく行うことができた。(上條 厚)

日本語補講 伊那地区初級

授業内容:ひらがな・カタカナの読み書き、挨拶、数字(時計・値段・助数詞)などの初級文法を学習し、日常生活に必要なコミュニケーションができるようにしている。

感想

初級クラスは学生の中途参加が頻繁にある(6月に2名、9月に3名、10月に3名、11月に2名追加)ので、新メンバーが入るたびに、復習を取り入れたり、宿題としてひらがなプリントを渡したりしながら、柔軟な対応をしている。

授業内容は、まず、ひらがな・カタカナの読み書きの練習を平行しながら、主教材に沿って挨拶・数字を学習していった。日常生活に必要な月日・時間や値段の言い方などは繰り返し練習し、助数詞のよ

うに複雑なものは一度に全部覚えさせるのではなく、「一冊」や「一本」のように基本的なものだけを学習し、その他は授業で使用されるたびに提示するようにした。補講の目的は「日常生活を円滑に行うための日本語講座」なので、文法よりも会話に重点をおいて、ロールプレイやゲームによる発話練習を数多く行っている。また、近くのスーパーへ一緒に行き、野菜や果物の名前を紹介する授業も行った。漢字圏以外の学生（タイ・バングラディッシュなど）が多いので、主教材はビデオ『見る・聞く・話す』とワークブックを使い、その課の文法事項に合ったゲームやタスクは『クラス活動集』から引用している。漢字は月日、曜日、地名などの生活漢字や「信州大学」などのような漢字の読みを少しずつ取り入れている。

聴解練習は『楽しく聞こうⅠ』を使用している。始めはテープの速さに慣れず、何回か聞きなおしていたが、日本での生活に慣れてくるにつれて聞き取る力がついてきた。

学生は皆とても熱心で、分からないことがあるとすかさず質問し、ノートにせっせとメモしている。ほとんどの学生がゼロ学習者だが、数ヶ月経つと習った単語や構文を駆使して、日本語での会話を楽しむようになっている。文法の苦手な学生が練習問題に詰まっていると、先にできた学生が教えてあげるなど学生の仲が良く、終始和やかな雰囲気である。また、学生の国籍がバラエティに富んでいるので、日本文化についてだけでなく、お互いの文化についても理解を深め、国際交流の場としても役立っている。（山本もと子、高石久美子）

日本語補講 伊那地区中級

授業内容：主教材に沿って基本文型を学習しながら、ロールプレイやゲームによる発話練習を行い円滑なコミュニケーションができるようにする。

感想

中級クラスは昨年度初級クラスを受講した学生（中級レベル）と中級クラスが2回目の学生（中上級レベル）が入り混じっているので、かなりレベルの差がある。また、初級クラスと中級クラスの両方に出席する熱心な学生（初級レベル）もいるが、一応、今年度初めて中級クラスを受講する学生（中級レベル）のレベルに合わせた教材を用いている。

授業内容は、昨年度から引き続いて、ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』とそのワークブックを主教材にし、基本文型を学習した後に、その構文を使って『クラス活動集101』、『続・クラス活動131』などを参考にゲームやロールプレイを行って、定着を図っている。中級クラスはほとんど中国の学生なので文法問題は得意だが、会話が苦手なのでなるべく発話練習に時間をかけるようにしている。

また、学生の要望に答えて漢字学習を行っている。非漢字圏の学生も混じっているので、地名や「禁煙」などの生活漢字やキャンパス用語の漢字の意味と読みを学習している。聴解練習は主教材のビデオに加えて、毎回『初級 毎日の聞き取り50日 上・下』を行っているが、中上級レベルの学生には少し易しいので、そこで使用された単語や関連語句から話を発展させて語彙力を増やすようにしている。

読解は『中級から学ぶテーマ別 日本語』を取り上げ、まとまった文の内容が理解できるようにしていたが、途中から漢字圏の学生が少なくなり少し難しくなったので、「日本の人口」や「梅雨、台風」などのような日本事情の読み物を取り上げた。作文は「研究室」のことや「教習所に通ったこと」など各々の日常の出来事を書き、書いた後、口頭発表している。書くことが得意な人と話すことが得意な人に分かれるが、お互いの生活がわかり、情報交換にもなっている。日本事情の学習を兼ねて、年賀状を書き、はがきの書き方を練習した。（山本もと子、高石久美子）

日本語補講「SUNS中上級」

以前より行われてきた初級および初中級レベルの学習者を対象にした日本語補講では、中級以上の学習者の日本語学習ニーズには応えられなかった。そこで、平成13年4月より、松本の旭キャンパス、長野の西長野キャンパスと若里キャンパス、上田の常田キャンパス、南箕輪の農学部キャンパスの計5キャンパスにいる留学生を対象に「SUNS中上級補講」が開始された。SUNSとは、Shinshu University

Network Systemの略称であり、マイクロ波を使って5キャンパスを結び、画像と音声を相互にやりとりするシステムである。これにより、松本にいる1人の教師が、5キャンパスに散在する留学生に日本語を指導することが可能となっている。留学生センターの佐藤が担当している。

主教材は『新日本語の中級』で、適宜『毎日の聞き取り50日』も用いた。この授業では、中級表現の導入と初級文型の復習をしつつ、聴解力を高めるための工夫をしている。また、多方面にわたる日本事情を指導することも目的としている。

受講生は、平成13年10月から14年9月まで、5キャンパスで述べ68名である。単位に関わりない授業であるため、申込方法・出席確認もそれほど厳しくなく、途中参加、受講中止なども見られる。なお、平成14年度9月末時点では、3キャンパスの11名が受講していた。

(佐藤友則)

日韓共同理工系学部留学生事業予備教育

学生の初めての受け入れ

日韓共同理工系学部留学生事業による留学生を、本学では平成13年度より受け入れ、その予備教育を留学生センターが行った。予備教育は学部に入學する前の日本語教育と理工系科目の教育である。

同事業は日本政府と韓国政府の協定により、日本の国立大学の理工系学部が韓国人学生を毎年100名程度（徐々に増加する予定）、10年間にわたって受け入れるものであり、平成12年度から始まった。ただし本学では平成12年度は受け入れなかった。当該学生たちは韓国の高校を卒業後、韓国と日本で半年ずつ予備教育を受け、その後、日本の大学の学部に入學する。韓国での予備教育は慶熙大学校国際教育院でまとめて行い、日本での予備教育は進学先大学で行う。韓国の高校は2月に卒業であり、3月から予備教育が始まる。その半年が終了後、来日し、日本での予備教育が始まる。

同事業の学生を本学でも平成13年度から受け入れ始め、予備教育を留学生センターが担当した。学生数は5名で、内訳は、工学部4名（男3、女1）、繊維学部1名（男）である。学生たちは平成13年10月24日に来日し、本学に来た。

予備教育の内容

予備教育は、平成13年10月29日から平成14年3月13日まで、17週間行われた。日本語研修コースの授業日程とは異なっている。それは学生たちの来日時期が10月24日と、10月の遅い時期であり、日本語研修コースの日程とは合わなかったからである。

予備教育の授業科目は次のとおりであった。

日 本 語	8 コマ（週4日午前2コマ。担当、今村一子2コマ・熊崎さとみ4コマ・大橋敦夫2コマ）
日本語書き方	1 コマ（上條 厚）
カウンセリング	1 コマ（村瀬さな子）
数学演習・工学日本語数学	各1コマ（小柴善一郎）
物理演習・工学日本語物理	各1コマ（森 覚）
化学演習・工学日本語化学	各1コマ（川崎貴史）
生物演習・工学日本語生物	各1コマ（張 光玟）

上記のとおり理工系の授業があり、計8コマで、全体のほぼ半分を占めている。それは学部入学後に必要な学力の再確認と、講義に使われる理工系日本語の学習のためである。

「日本語」の担当者はすべて非常勤講師である。ただし授業の計画等は専任教員が立案し、それに基いて行った。「日本語書き方」と「カウンセリング」の担当者は専任教員である。理工系授業の担当者はすべて謝金講師である。その内、数学・物理・化学の担当者は、本学を定年退官した人たちである。生物の担当者は本学大学院工学系研究科博士課程の学生で、韓国人である。これらの選定については、理学部選出の留学生センター運営委員の助力によるところが大きい。

学生5人には能力差があった。それについては来日前に韓国側から送られた資料によっても、想像することができた。しかしながら5人を1まとめにして授業を行った。「日本語」の授業については、能力の特に違う者を日本語研修コースのクラスの方に出席させることが可能性としてはあり、5人の内のもっとも能力の低い学生がその対象と考えられたが、全体の状況から見てそれは行わなかった。

「日本語」の授業は日本語全般について能力を高めることを目指したものであり、日本語学習の中心となるものである。かれらの来日後、日本語の試験をしてみた結果、「日本語」の授業では『みんなの日本語Ⅱ』（スリーエーネットワーク）を始めから学習することとした。能力の高い学生にとってはつまらないものであったろうが、仕方がなかった。その終了後は『新日本語の中級』（スリーエーネット

ワーク)を教材とした。

「日本語書き方」は読み書きの能力向上を目指すものである。ただし必要に応じてこの時間を生活指導に当てることがあった。「カウンセリング」は文字どおりカウンセリングをするのが目的であるが、特に必要がない場合は日本語学習に当てた。この2つの時間に日本語の授業をするときは、『みんなの日本語Ⅱ 初級で読めるトピック25』(スリーエーネットワーク)を主教材とした。

理工系の授業は、それぞれ担当者の判断に基づいて教材が選定され、授業が行われた。

学生5名の予備教育修了時の日本語能力について見ると、3名については、学部での授業に十分対応できる程度まで能力が向上したと判断する。残りの2名については不十分だと言わざるをえない程度であった。そうした学生にどう対処すべきか、1つの課題と言えよう。

課外活動

教室以外での学習活動も行われた。

生物の授業の担当者は前述のように本学の大学院生であるが、山地水環境教育研究センターに常駐する人である。授業の一環として同センターとその周辺の見学も行った。それは12月15日に行われた。同センター・諏訪湖・諏訪湖博物館等を見学し、実地に基づく授業がなされ、良い機会となった。

なおその時、学生たちは松本から電車で同センターまで行くことになった。それは自分たちだけで日本国内を目的地まで小旅行する、ちょうど良い機会であった。そこで前もって、間違いなく時間どおりに目的地まで行くための学習をさせた。その指導は12月10日に行い、本学または自宅から松本駅までの行き方・所要時間の確認と、松本駅から山地水環境教育研究センターの最寄り駅である上諏訪駅までの行き方の確認を、自分たちで行わせた。

課外活動の大きなものとしては沖縄への研修旅行があった。それは2月25日～27日、2泊3日で行われた。沖縄本島のみでの見学であったが、南部と中部の主要な所を参観した。それらは、首里城公園・琉球村・万座毛・沖縄記念公園・玉泉洞などである。

なお研修旅行のことを作文としてまとめさせることを考えたが、予備教育期間の終了までに時間が少なかったこともあり、果たせなかった。

生活指導

学生たちの中には真面目な学生から授業に欠席がちな学生まで、様々な者がいた。予備教育は単位を伴わないものであるとはいえ、欠席が多いのは困ることである。他大学の様子を聞いてみても、生活指導上問題のない学生、ある学生、いろいろいるようである。学生は様々なことを踏まえた上での指導を考えるべきであろう。

今後の展望

学生の水準の違いが大きいことは難点の1つであった。それに対する方策として、日本語の授業については日本語研修コースの授業に組み込んで行うことが考えられる。そうすれば日本語は水準に応じて指導することができ、より効果的となる。ただしそのためには同事業の予備教育と日本語研修コースを、同時に開始できるようにすることが必要である。

休みがちな学生がいたことも困ったことであるが、休ませないような手立てを考えることも必要であろう。そのためには、学生に対して目がよく届くような体制作りも必要であろう。また受け入れ学部との連携も強めるべきであろう。

平成14年度は同事業による本学への学生配置はなかった。予備教育生の進学先は、平成14年度までは韓国での予備教育修了時に決められていた。それでこういう結果であった。学生受け入れを可能としているのに配置がなかった大学は他にも何校かあり、本学だけではないから、本学が特に敬遠されたというわけではない。

平成15年度は予備教育生の合格決定と同時に配置大学も決めるように、やり方が変更された。その結

果、本学には4名の配置があった。平成13年度の経験を踏まえ、より良い予備教育のあり方を考えていくべきであろう。

資料 日韓共同理工学部留学生事業予備教育修了学生

柳 在根 (リュ ジェグン)	男	1982. 5. 6生	工学部電気電子工学科
丁 禎雨 (ジョン ジンウ)	女	1982.11.30生	工学部社会開発工学科
崔 成勳 (チェ ソンフン)	男	1982. 7.19生	工学部社会開発工学科
朴 賢鍾 (パク ヒョンジョン)	男	1982. 9.24生	工学部情報工学科
沈 喆遇 (シム チョルウ)	男	1982. 8. 6生	繊維学部応用生物科学科

(上條 厚)

工学日本語物理及び物理演習

授業時間：毎木曜日（2コマ4時間、計68時間）

講義及び演習の目的

留学生が進学を希望している工学系学部は、物理は必修科目である。授業では、予備教育として、高校課程の物理の学修をさらに深めるとともに、留学生が一般教育課程の物理の科目に順応していくことができるようにする。そのため、日本語で書かれた物理を読むことに慣れ、また、学習した内容を身につけるため、できるだけ多くの演習問題を解かせ、それを日本語で書き、口頭発表することによって日本語の力を向上させる。

講義の内容

テキストとして、日本の高校の物理IB と物理Ⅱ（ともに数研出版；平成6年版）を用いるが、半年では教科書全体をカバーできないので、下記の講義内容とした。

月 日	講 義 内 容
11月1日	ガイダンス（時間割、講義内容、学習の進め方、宿題など）
8日	速度、加速度、ベクトル
15日	力、運動の三法則
22日	運動量と力積、運動量の保存
29日	仕事と運動エネルギー
12月6日	位置のエネルギー、力学的エネルギーの保存則
13日	等速円運動、単振動
20日	中間試験
1月10日	万有引力
17日	電荷、クーロンの法則、電場、電位
24日	電流のつくる磁場、アンペールの法則
31日	電流が磁場から受ける力
2月7日	ロレンツ力
14日	電磁誘導の法則
21日	インダクタンス、交流
28日	期末試験
3月7日	試験内容の説明

授業の進め方

- (1) 教師が一方的に講義するのではなく、学生が積極的に授業に参加し、特に、日本語で議論するようにする。漢字の意味は分かっている場合が多いので、説明文や問題文をきちんと声を出して読ませ、読み方や発音も学ばせる。高校レベルの物理はすでに学習しているから、教科書は日本語による読み・書きの参考にする。
 - (2) 授業は、講義の内容に合わせた演習問題を中心にする（講義1、演習3の割合）。演習問題は、講義の内容に沿った適当な問題（いろいろな教科書中の演習問題や日本の大学入試問題など）を選び、毎週全員に（前週に）割り当て、各人は、次の週の授業時間に、割り当てられた問題を皆の前で説明する。その時に教師の側から内容について説明を加える。日本語での文章の書き方の練習として、毎週の宿題は日本語で清書し提出させる。提出された宿題は添削して返す。
 - (3) 物理の理解度と日本語の理解の進捗状況を知るため、中間試験と期末試験を行なう。
- 成績評価の方法：中間及び期末試験の成績、宿題（9回）を総合評価する。

考 察

学生、教師ともに、はじめての経験であるので、初めの内はどのように授業を進めれば良いのか分からなかった。何回か回を重ねるうちに、双方ともうちとけて楽しく授業が進行した（なお、彼らは日本の学生より礼儀正しい）。

講義の前に、各学生の日本語及び理科各科目の韓国での試験結果が分かっていたが、実際、5人の中には日本語の実力に差があり、それがその後の物理の学習活動全般（読み、書き及び発表）にも表れていた。日本語のレベルの高い学生ほど、全般にわたる評価は良い。宿題を日本語で清書して提出することは彼らにはかなりの負担のようであった。

来日前の（韓国での）物理の試験結果は必ずしも高くはなかったが、授業での受け答えや中間及び期末試験の結果から判断して、彼らの物理の理解度は日本の学生に比べて中の上位と判断される（繊維学部生物系志望の学生にはやや問題があったが）。特に、日本語のレベルの高い1人の学生は活発な学習意欲をもち、かつ理解度も良好であった。

全体的に、全員、学習態度、発表態度は良好であった。何よりも日本語力を高めることが必要であると感じられた。寒くなって、風邪などで体調を壊し欠席する者が出てきたりして、後半やや低調になった。

最後に、学生からこの講義に対する感想や希望などを聞く機会を逸したのは残念であった。また、各学部に入学後の彼らの学習状況や順応状況を知ることができればと思っている。

（森 寛）

短期留学プログラム（短プロ）

信州大学は、『世界の多様な文化・思想の交わる場所であり、それらを理解し受け入れ共に生きる若者を育てます』の理念を掲げ、『諸外国から学生・研究者を積極的に受け入れ、世界に開かれた大学とし、信州の国際交流の大きい推進力となります』の目標の下、留学生センターが中心となって、全学的に短期留学生への英語による授業の実施を留学生センター運営委員会などで検討してきました。平成13年度春学期から学内措置とはいえ、正式に短期留学プログラムが開始されました。

信州の特色を授業に反映させたいという願いから、授業科目総称を『信州の環境と国際交流』として、全学に短期留学プログラムの授業計画を立てて頂くようお願いしました。第1期に続き、平成13年度秋学期および平成14年度春学期短期留学プログラム授業計画が次の授業科目表に示されているようにできました。

学 部	担 当 教 官	授 業 料 目 名	開講時期
人 文 学 部	井上逸平	日本と日本語のコミュニケーション	13年度秋学期
教 育 学 部	徳井厚子 他	「小学生との体験授業」	13年度秋学期
理 学 部	三宅康幸 他	日本の地質(Geology of Japan)	13年度秋学期
工 学 部	アサノ・デイビッド 他	長野における工業と技術	13年度秋学期
織 維 学 部	森川 陽 他	信州の環境と国際交流	13年度秋学期
留学生センター	村瀬さな子	日本人のライフスタイル	13年度秋学期
留学生センター	藤沢文人	日本語	13年度秋学期
留学生センター	中村純子	言語行動の文化的相違	13年度秋学期
留学生センター	内藤哲雄	ジェスチャーの日英比較	14年度春学期
留学生センター	高石道明	21世紀の日本の教育	14年度春学期
留学生センター	上條 厚	日本の歴史と文化	14年度春学期
留学生センター	村田 明	日本語と日本文化	14年度春学期
留学生センター	中村純子	コミュニケーション・ギャップ	14年度春学期
留学生センター	山本もと子	異文化コミュニケーション	14年度春学期
医 学 部	小宮山 淳 他	今日の日本の医療	夏期集中
工 学 部	アサノ・デイビッド 他	長野における工業と技術	夏期集中
農 学 部	萩原素之 他	信州における農林業	夏期集中

13年度秋学期は延べ7人の受講希望者がありました。また14年度春学期は延べ7人の受講希望者があり、最終的に3人の受講者に成績評価が出されました。

13年度秋学期受講希望者数

授 業 科 目	受講者数
日本と日本語のコミュニケーション	2
日本の地質	1
日本人のライフスタイル	2
言語行動の文化的相違	2

14年度春学期受講希望者数

授 業 科 目	受講者数
ジェスチャーの日英比較	1
21世紀の日本の教育	2
コミュニケーション・ギャップ	3
異文化コミュニケーション	2

13年度春学期同様、授業計画を立てていただいたけれども、受講生が集まらなかったために開講できなかった授業があります。短プロ授業実施のための現体制化ではこのような状況も致し方ないと思われます。

相 談 ・ 指 導 業 務

1. はじめに

今期の信州大学留学生センターは、人事面でいくつかの異動があった。

まず、藤沢教官が病気療養のため1年間休職となったこと。高石事務局長が教授職就任となったことである。他に、留学生課では、林泰代氏が学内異動した後任に山田アカネ氏が半年間採用された。

2. 信州大学留学生センターの相談・指導業務の特色

信州大学は、5キャンパスに8学部が存在するという、分散型大学の特色を持つ。しかも、(北海道を除くと、岩手県、福島県に次ぐ)全国第3位の広さを誇る長野県内に、それぞれのキャンパスは遠く離れて存在している。そのためか、信州大学の各分散学部ではもっぱら所在地域との結びつきが強く、同一大学としての各キャンパス間の横の結びつきには、これまであまり関心が払われてこなかったように思われる。平成11年4月に発足した信州大学留学生センターでは、同年6月に教官数が充実して以来、留学生センター長の強い意向で、分散学部でも相談・指導業務を行うべく、留学生センター教官が、月に一回、松本地区以外の各キャンパスに出向くことになった。

ところで、これより1年前の平成10年度から、信州大学保健管理センターで、月に一回分散キャンパスを巡回診療する試みが始められた。各キャンパスには以前から保健室が完備されており、近医による校医としての診察日が既に設けられていたが、新しい保健管理センター長の赴任以来、保健管理センター全体の運営や活動内容の全面的な見直しをはかる一環として、松本地区以外の分散キャンパスでの巡回診療が開始されたものだった。留学生センターの取り組みもそれに続くものであるが、単科大学の集合体のごとき信州大学で、留学生というキーワードをもとに、学部間の連携を視野に入れた全学的なセンターとしての取り組みが進んだことは、信州大学に於いては画期的な試みだったと言える。

既に歴史のある保健管理センターと違って、新しい留学生センターの認知度は低く、センター教官の来訪が、必ずしも各キャンパスで待ち望まれているわけではなかったため、留学生センター教官は、巡回訪問を根付かせるべく、当初から手探りでの努力が始まった。幸い、留学生センター相談指導業務担当の筆者は、精神科医師であるため、各キャンパスの保健室を訪問することから巡回訪問を始めた。学部により、学生数の多さや支援体制の不備から、保健師に異常なまでの負担が及んでいる現状が明らかとなり、改めて、留学生相談指導を通しての留学生センター巡回訪問の意義を認識できた。また、他の留学生センター教官の巡回訪問では、専門の日本語教育を通して、留学生相談に応じる体制が徐々に出来上がった。

平成14年度 各学部訪問スケジュール

	教育学部／工学部	農 学 部	織 維 学 部
4 月	上 條	村 瀬	村 瀬
5 月	村 瀬	村 瀬	村 田
6 月	村 瀬	佐 藤	村 瀬
7 月	村 田	村 瀬	村 瀬
8 月	村 瀬	村 瀬	佐 藤
9 月	村 瀬	上 條	村 瀬
10 月	佐 藤	村 瀬	村 瀬
11 月	村 瀬	村 瀬	上 條
12 月	村 瀬	村 田	村 瀬
1 月	上 條	村 瀬	村 瀬
2 月	村 瀬	村 瀬	村 田
3 月	村 瀬	佐 藤	村 瀬

3. 信州大学留学生センターの相談・指導業務の実態

○大学本部、および留学生センターや4学部のある松本市旭キャンパス

- ・留学生センター教官それぞれが、週に一日、オフィスアワーを担当している。しかし、実際には、オフィスアワーだけに限らず、随時相談に応じている。対象は、旭キャンパスの留学生にとどまらず、信州大学に在籍する全ての留学生およびその関係者である。
- ・人文学部：坂口留学生専門教育担当教官による相談・指導業務。30名
- ・経済学部：秋庭留学生専門教育担当教官による相談・指導業務。83名
- ・理学部：留学生専門教育担当教官が配属されていない学部。10名
- ・医学部：牧留学生専門教育担当教官による相談・指導業務。50名

○それ以外の4キャンパス

前述の留学生センター教官による松本市旭キャンパス以外の4キャンパス訪問相談・指導業務のうち、全体の3分の2に当たる村瀬教官の担当分は、主に保健室とタイアップしての相談・指導業務である。その他の4教官の訪問相談・指導業務は、日本語および日本事情教育指導を通じての、相談・指導業務である。

- ・教育学部：留学生専門教育担当教官が配属されていない学部。14名
- ・工学部：高野留学生専門教育担当教官による相談・指導業務。86名
- ・農学部：留学生専門教育担当教官が配属されていない学部。42名
- ・繊維学部：鮑留学生専門教育担当教官による相談・指導業務。45名

*人数は何れも平成14年5月1日現在の各学部の留学生数

*教育学部（長野市の西長野キャンパス）と多数の留学生が在籍する工学部（長野市の若里キャンパス）では、引き続き、ボランティアの日本語教師（英語教師でもある）北澤先生の尽力に負うところが大きい。氏は、連日、両キャンパスを交互に訪問し、終日、希望者に日本語指導を行い、必要ならば相談にも応じておられる。

*また、各キャンパスでの保健師や補講担当の日本語教師の尽力に負うところが大きい。保健師：特に、日本人の留学生専門教育担当教官がいない繊維学部の斉藤巴保健師、留学生専門教育担当教官が配属されていない農学部の武田弘子保健師。（他に工学部の徳原さえ美保健師、教育学部の高橋豊江保健師。）

補講担当の日本語教師：農学部の高石久美子先生、山本もと子先生。長野（工学部・教育学部合同）の青柳先生、今村先生、合津先生。繊維学部の村山先生。松本キャンパスの村田満見子先生。

また、各学部の留学生担当の事務職員は、常に留学生と接する立場にあるが、今年度も何人かの異動があった。

繊維学部：熊木明彦専門職員（清水道雄専門職員の退職に伴い2002年4月より）

農学部：小野英二（長く同職にあった橋倉貞人専門職員の異動に伴い）

工学部：福澤賢一郎（以前の任地繊維学部でも同職にあった）

教育学部：井口祥子主任・中澤友幸専門職員

4. 相談指導の概況

○相談・指導の件数

留学生センターの教官および非常勤講師が、2001年10月～2002年9月の間に扱った相談・指導件数を以下に示す。

(2001年10月～2002年9月)

項 目	件 数	項 目	件 数
a. 修学関係	129	g. 家 庭	18
b. 学内諸手続き	22	h. 健康・医療	184
c. 来日・滞在	0	i. 交 流	42
d. 経済問題	68	j. 事故・事件	32
e. 宿舎探し	80	k. そ の 他	32
f. 人間関係	59		

* 注意点：件数の数え方、および、内容の解釈が、教官により若干異なる。また、留学生センターが行う補講での相談・指導件数は、一部しか含まれていない。

○相談・指導の内容

相談内容の分類方法はいろいろあろうが、ここでは、一応、以下のように分類した。

- a. 修学関係（勉学／日本語学習／学位／就職などの進路／その他）
- b. 学内諸手続き（学費減免／奨学金申請／その他）
- c. 来日・滞在（入国／在留／その他）
- d. 経済問題（奨学金／アルバイト／学費／生活費／その他）
- e. 宿舎探し（学寮／民間寮／アパート／ホームステイ／入居保証／その他）
- f. 人間関係（研究室留学生／研究室日本人学生／研究室教官／事務／アルバイト先／異性／親族／家主／近隣／その他）
- g. 家 庭（夫婦／家事／育児／教育／その他）
- h. 健康・医療（体の不調／医療機関への受診／国保／留学生医療補助／入退院／その他）
- i. 交 流（チューター／交流／イベント等／ボランティア／雑談など親しい関わり／その他）
- j. 事故・事件（交通事故／遺失／その他）
- k. そ の 他

5. 全留学生対象の精神ストレスに関する自記式アンケート調査結果

信州大学留学生センター発足後丸2年が経過した平成13年5月から6月にかけて、信州大学留学生センターを、少なくとも信州大学全体の留学生には周知させることと、留学生にとって異文化である日本における留学生のストレス度を調査し、今後の相談指導業務に還元させるべく、信州大学全留学生を対象に、自記式ストレス調査を含む面接調査を実施した。

本学は、前述のように分散型キャンパスの特色を有するため、学部別でのストレス度を評価してみた。その結果、人文学部、教育学部、経済学部、理学部、医学部、工学部、農学部、繊維学部の8学部で、BDI (Beck Depression Inventory) によるストレス度を評価すると、人文学部が最もストレス度が高く、医学部が最もストレス度が低かった。また、抑鬱症状を認める学生数の割合も、他の学部に比して人文学部が高く医学部が低かった。医学部が、他の学部に比し、抑うつ症状を有する者の割合が少なかったが、その理由として医学部留学生にみられる特殊な事情をあげてみると、圧倒的に中国人が多いこと、そのため中国人同士の情報が得られやすいこと、医学部留学生のうち多くが夫婦または家族滞在做していること、本国ではほとんどが医者であり、能力的にも経済的にも恵まれている特権階級であること、などが考えられる。

次いで、キャンパス別に留学生のストレス度の差が認められるか否かについては、人文学部、または医学部が、単独で1キャンパスに存在する場合には、キャンパス間で留学生のストレス度に差があることになるが、人文学部、経済学部、理学部、医学部の4学部は、ともに同一キャンパスに存在している

ため、キャンパス間の違いが、留学生のストレスへ影響することは否定できる。

抑うつ症状を有する者のうち、中等度以上の抑うつ症状を示す者には、特に精神面でのケアを要するが、中等度以上の抑うつ症状のあった留学生の中には、学業上の問題（卒業年時であったこと、および適性など）や、本国での家庭の事情の存在が認められるなどの要因が存在していることが多かった。このように、ストレス状況が懸念された学生は、自記式アンケート調査結果からも、中等度のストレス状態を示していることが分かった。

他方、これら中等度ストレス状態にある学生は、抑うつ状態ゆえに何事に対しても意欲的でなくなるどころから、自主的にアンケート調査に応じるとは考えにくく、今回のように留学生全員に試行するという強い決意で調査を試行しない限り、真の意味での留学生の実態は把握できないものと思われる。

また、自記式であるからには、記載者本人が、調査票に真面目に回答しなければ、回答結果が意味を持たなくなる。調査内容は、留学生のストレス度を測るものであるから、本質的には留学生にとって有益な調査である。しかしながら、記載には5～10分を要するため、回答すること自体がストレスになっていては、正確なデータが得られない恐れがある。そのため、本調査では、秘密が厳守されることを納得させた上で、調査票に回答することでのストレスを極力回避するよう配慮された。

この調査結果から、今回の自記式アンケート調査が、留学生のメンタルケアを図る上で、非常に有効な手段であることが立証された。ただ、結果を解析するまでに、約1年を要したため、面接できなかった一部の留学生の中にも、中等度抑うつ症状を認めた者がいた。幸い何事も生じなかったものの、今後は、調査後直ちに結果を分析し、相談指導業務に役立てるとともに、問題ある学生には、個別に手厚く援助の手をさしのべるつもりである。さらに、このように有効な調査であるからには、各学部の留学生専門教育担当教官をはじめ、関係者各位に、調査に対してできるだけの協力を仰ぎたい。（「相談業務からみた留学生ストレス調査の妥当性」『留学生センター紀要』第4号より引用）

6. 留学生センター企画による全学留学生見学旅行について

信州大学全体の留学生の交流をはかるための、留学生センター企画による全学留学生見学旅行を、今年度は、9月27日（金）、28日（土）の両日、奈良への一泊旅行として実施した。

この全学留学生見学旅行は、巡回相談指導業務において、各キャンパス（分散学部）の留学生から、キャンパス間の交流を図りたいと、いつも強く要望されることからその必要性が明らかとなったもので、2000年9月29日（金）には明治村へ、2001年9月28日（金）には日光への旅行を実施した。

今年度の旅行は、予め行った旅行についてのアンケート調査の結果に基づき実施されたもので、古い日本文化探訪を泊旅行でという要望に応じて、奈良への一泊旅行となった。

参考：留学生223名からの回答が得られ、(2)留学生センターの旅行は、「あったほうがよい」207名、「どちらでもよい」11名、「やめたほうがよい」0名、(3)‘どこへ行きたいですか’の質問には、「古い日本（例：京都など）」112名、「新しい日本（例：ディズニーランドなど）」71名、「その他」14名、(4)旅行は、「日帰りがよい」21名、「一泊がよい」157名、「どちらでもよい」47名、(5)‘一泊旅行では、お金を払うことになるかもしれません。いくらぐらいなら払ってでも行きたいですか。’の質問には、「3000円まで」69名、「5000円まで」100名、「10000円まで」29名、「10000円以上でもよい」7名、「お金がいるなら行きたくない」10名、との結果が得られた。（「センター主催見学旅行へのアンケート調査結果」『留学生センター紀要』第3号より引用）

①第3回留学生センター企画による全学留学生奈良見学旅行

松本市（人文学部・経済学部・理学部・医学部）、長野市（教育学部キャンパスと工学部キャンパスとが合流）、南箕輪村（農学部）、上田市（繊維学部）の各キャンパスから、例年通りバス1台ずつを発車させ、計4台のバスを連ねて奈良まで一泊旅行した。

第1日目：東大寺、奈良公園、薬師寺、唐招提寺

第2日目：法隆寺、橿原神宮

橿原神宮から4台のバスにて順次帰路に就いたが、松本キャンパスに向かうバスが最後に発車する際、信州大学の留学生の財布が警察に届けられたとの情報が寄せられた。既に出発した他キャンパスの留学生の財布であることが後で分かったが、当初は、たまたま松本キャンパスの留学生にもその財布の持ち主と同姓の学生がいたため、混乱して一層手続きに手間取った。財布が本人に無事届くまで、分散キャンパスを有する大学ゆえの様々な苦労があったが、留学生のとりわけ大切な財布を、幸いにも善意の人に拾われたことを良しとしたい。

参加者：人文学部6名、経済学部6名、理学部1名、医学部13名、共通教育（遠隔地学部の留学生だが、1年生のため松本キャンパス在住）1名、留学生センター3名、以上松本キャンパス。教育学部3名、工学部15名、農学部19名、繊維学部10名。合計77名。各キャンパスより引率教職員計11名。学生・教職員の合計88名であった。

②奈良旅行後のアンケート調査結果（回答者：80名）

（*回答数80のうち、職員1名の回答は、主にコメントであったため集計より除外。）

○奈良旅行はどうでしたか。理由があれば、それも書いて下さい。

- ・とてもよかった：人文学部3名、経済学部3名、理学部1名、医学部6名、共通教育（遠隔地学部の1年生）及び留学生センター4名、教育学部3名、工学部11名、農学部15名、繊維学部3名、計49名。

理由：観光名所。中日両国関係よく分かった。歴史の奈良を見たから。素晴らしい所が見られて嬉しい。見る所がもっと多ければよかった。東大寺に行けた。もっといっぱい、留学生の方々、先生方と一緒に楽しい旅をしたい。楽しかった（2名）。景色も良いし、日本の歴史も少し了解できて勉強になった。各学部の留学生や先生方とコミュニケーションできて本当に嬉しかった。奈良の景色はとてもきれいで、食べ物も美味しく、とても気持ちよい。鹿がとてもかわいかった。ホテルがとても良かった。雨も見学時にはほとんど降らなかった。日本人の原点を再認識できた。多くの留学生と参加できたこと。素晴らしかった。安くて良い所いっぱい。経験のない所を見学させてくれました。時間が少なかったですが、日本の古い文化を体験できました。少し遠かったですが、一泊だったので親睦が深まった。交流して楽しかった。一泊してゆっくり見学できました。奈良と言う古都の雰囲気がよく分かりました。とても落ち着いて美しい所です。一泊できたのでゆっくりできた。バスの中もとても楽しく、みんなと交流できて良かった。とても興味深い所だった。歴史の源・源流点を感じた。日本の古い文化が見られた。

- ・大体良かった：人文学部3名、経済学部2名、医学部6名、留学生センター2名、教育学部1名、工学部5名、農学部6名、繊維学部2名、計27名。

理由：各名所の説明があって、とてもいいと思います。唐招提寺が一番見たかったんですが、残念ながら全部は見られなかった。寺ばかりでちょっと・・・でも、一泊旅行だったから楽しかった。奈良はとても良かったですが、二日間ともお寺ばかりで少し飽きたかと思います。別の観光内容もはさめればいいかなと思います。違う国の人と一緒に部屋でちょっと不便でした。部屋で一緒に遊びにくいからです。友達と同室の場合、一緒に遅くまで遊べるので、皆さんもっと楽しくなると思います。古い街が好きだけど、ディズニーランドの方がもっと好きです。雨が降ったから。旅行期間もっと長くして欲しい。遊園地、温泉へ行ければいいと思う。古い町奈良、特にお寺など見れて良かった。食事にビールがないのが残念でした。旅行の企画が良かった。

- *繊維学部の職員の人も引率して欲しかった。（コメント：繊維学部職員参加予定であった3人も他の用務で参加できなかった。）

- ・まあまあ（ふつう）：経済学部1名、医学部1名、工学部2名、計4名。

団体旅行だから。見学ばかりですので、時間がなくあまり沢山のこと見れなかった。でも、楽しかった。

た。今度チャンスあれば、是非もう一度参加してみたい。見学先はお寺ばかりで、勉強になります
が楽しくありません。

- ・あまり良くなかった：0名
- ・全く良くなかった：0名

○留学生の旅行には、各学部での留学生の旅行と、信州大学全体の留学生の旅行が考えられます。ど
ちらのタイプの旅行がよいと思いますか。理由があれば、それも書いて下さい。

- ・各学部での留学生の旅行だけでよい：人文学部1名、経済学部1名、共通教育（遠隔地学部の1年
生）及び留学生センター2名、教育学部1名、工学部1名、農学部5名、計11名。

理由：知っていない人と知り合うことができますから（コメント：遠隔地学部の学生だが、共通教育
のため松本在住である留学生の回答）。人数の少ない方が、親しくなるきっかけが多いと思
います。みんなあまり知らないですから。友達になれる。人数が少ないと、移動や宿も取り
やすいと思う。

- ・信州大学全体の留学生の旅行だけでよい：人文学部1名、経済学部2名、理学部1名、医学部4名、
留学生センター1名、教育学部3名、工学部11名、農学部6名、繊維学部3名、計32名。

理由：各学部の留学生と交流ができるから。友達を作れる。他の学部の学生と話したい。他の学部
の学生と話し合うのが良かった。範囲広く交流できるからだ。人が多かったら面白いと思い
ます。他のキャンパスの留学生と会うことができるから。各学部の様子が分かる。多くの
人達と交流できるから。各学部の留学生と交流するチャンスはあまりないので、旅行を通して
各学部の留学生と交流するチャンスができます。交流できますから。他学部の留学生の様子
を知ることができて良い。各学部の学生と交流できるのが大切です。信州大学全体の旅行は
とても楽しい。他の国からの留学生との交流は、とても役に立つ。信州大学全体の留学生の
旅行は一泊してゆっくりできて楽しかった。いろいろな学部の留学生で交流できる。

- ・どちらも実施してほしい：人文学部4名、経済学部3名、医学部9名、留学生センター2名、工学
部6名、農学部10名、繊維学部2名、計36名。

理由：旅行したい。学部だけだと人数が少なく騒がしくない。大学全体だと泊まることが可能で
見る場所が多くなる。同じ学部なら盛り上がりやすい。大学全体だと各学部の留学生の間に
交流ができます。学部だけだと割合少人数なので、もう少しゆっくり観光できるというメリッ
トもある。多くの人々と交流できるから。各学部および大学全体の学生交流がもっとも
できると思います。予算に余裕があれば。みんなとだととても親しくなれて面白くてよい。
他の学部とのつながりと各学部のやるべきことをこの旅行で分かる。2回実施できれば嬉し
いです。

- ・どちらも必要ない：0名

○今後、全留学生参加の旅行を実施する場合には、旅行の時期はいつ頃がよいですか。理由があれば、
それも書いて下さい。

- ・4月～6月：経済学部1名、理学部1名、医学部2名、留学生センター2名、工学部2名、農学部
2名、繊維学部1名、計11名。

理由：私のわがままな意見ですが、7月～9月や10月～12月は、学部の旅行があるが、4月～6月
は空いているので。天気がよい。春ですから。春に旅行したいので、沖縄が良いと思う。

- ・7月～9月：人文学部2名、経済学部3名、医学部3名、留学生センター1名、工学部9名、教育
学部3名、農学部13名、繊維学部3名、計37名。

理由：9月末が一番いいと思います。夏休みで時間があるから。暑くもなく寒くもない9～10月頃。
この時期はあまり忙しくないから。みんなと一緒に海に行きたいからです。今回ぐらいの時
期が参加しやすい。時間があります。期末テストの後であるため、ゆっくりできるし（気温）

天気もちょうどよい。夏休みですから、時間の余裕がありますし、天気もいいです。夏休み期間中。荷物が少ないから。夏休みで時間がある。夏休みだし、季節がとてもきれいな時期です。旅行にとってもよい天候です。日本では、とても天気の良い時期。夏休み。あまり忙しくない。天候が良い（3名）。旅行地では、あまり混んでいないのでゆっくり見ることができる。大学でのいろいろな授業を終わらせた時期だから。

- ・10月～12月：人文学部3名、経済学部2名、医学部4名、共通教育（遠隔地学部の1年生）及び留学生センター2名、工学部7名、農学部3名、繊維学部1名、計22名。

理由：秋の紅葉が見たいから。涼しく、紅葉の見られる時期の方がよい。天気がよい。授業が忙しくない。10月は、旅行シーズンとして、台風も来ないし最適。季節が一番良いと思う。長野県は寒いので、暖かい所に行きたいと思います。紅葉の時期で、涼しくていい。海の旅行へ行きたいから。

- ・1月～3月：人文学部1名、医学部1名、農学部1名、計3名。

理由：休み利用。冬が好きです。

- *他に、いつでもよい：経済学部1名、医学部5名、農学部2名、計8名。

天気が良いとき：教育学部1名。

7. まとめ

分散学部を有する信州大学での相談・指導業務の遂行には当初かなりの困難が予想されたが、発足後3年目を迎えた留学生センターの認知度は、教官陣の努力によりかえって分散学部で高くなっているほどである。

昨年度実施した全留学生対象の精神ストレスに関する自記式アンケート調査の結果から、この調査が留学生のメンタルケアを図る上で非常に有効な手段であることが明らかとなった。相談・指導業務の一環として毎年この調査を実施するとともに、様々なデータを解析して今後の相談・指導業務に役立てたい。

また、3回目を迎えた留学生センター企画による全学留学生見学旅行については、今回初めて一泊旅行を実施したが頗る好評であった。直後に実施した旅行に関するアンケート結果では、学部個別の旅行と留学生センター企画による全学留学生見学旅行とのどちらが良いかを問うたところ、両方実施して欲しいとの意見が多数であったことは当然だが、ほぼそれに匹敵するだけの者が留学生センター企画による全学留学生見学旅行だけでよいと回答し、学部個別の旅行だけでよいという回答数の3倍であった。旅行実施直後から、次回は是非新しい日本を見学したい等、筆者を見かけると旅行への希望を述べる者が多く、改めて全学留学生見学旅行を留学生センターが企画することの意味を実感している。

新学期に実施するオリエンテーションを充実させることは、昨年度来の課題であったが、諸般の事情で未だ充実したものにはなっていない。しかしながら、オリエンテーションを充実させることが、その後の留学生生活の良否を左右するとともに、アンケート調査および留学生センター企画による全学留学生見学旅行などの成果にも反映されるものであるから、まずは、オリエンテーションを充実させることを来期の最優先課題にしたい。

(村瀬さな子)

活 動 記 録

◇留学生と日本人のための公開セミナー

第1回 私の国の教育制度

信州大学留学生センターは、平成13年12月11日(火)午後6時より、一般市民に広く参加を呼びかけて行う公開講座「留学生と日本人のための公開セミナー『異なる素晴らしい文化』」を本学共通教育センター会議室にて実施した。第1回目「私の国の教育制度」には、本学教職員、学生、市民、約40人が参加した。

最初に留学生センターの村田教官が日本の教育制度について述べ、続いてインドネシア・ベトナム・中国の留学生が、自国の教育制度について述べた。その後、討論がなされた。以下に留学生の発言原稿を掲載する。

インドネシアの教育制度……………人文学部日本語・日本文化研修留学生 ハニ・ルファイダ

インドネシアの義務教育は日本と同じで、小学校から中学校までです。この義務教育はインドネシア全体で実施されています。しかし、最近は幼稚園から学校に行かせる両親が多いです。それはその両親の経済的な状況次第です。

生徒は中学を卒業してから、高等学校か高等専修学校に進学するという二つの進路があります。高等学校を卒業した生徒も高等専修学校を卒業した生徒も大学の入学試験を受けることができますが、高等専修学校の場合はたいていの生徒の目的は就職することです。また、高等学校では2年生になると、理学科と生物科、そして社会学科と言語学科という4つのクラスに分かれますが、言語学科クラスを開設している高等学校はほんのわずかしかなかった。

高校卒業者は大体大学に進学しますが、短期大学に進学する人もかなり多く、3年間の短期大学の卒業者は私立大学に進学することができます。また高等学校の卒業者は大学と短期大学だけではなく、ミリタリースクールに入学することができます。ミリタリースクールに入る人は大体男の人です。インドネシアの大学は日本と同じ4年間です。その4年間のうちで、3年生の終わりに、一ヶ月間田舎でボランティアのような社会活動をするプログラムがあります。実はこのプログラムは授業の科目で、単位は4です。

インドネシアの小中高は週6日制で、月曜日から土曜日までです。授業は午前と午後に分かれています。それはその学校の教室数と生徒数次第です。つまり、教室数より、生徒数のほうが多い学校は午前と午後両方に授業を行い、生徒は午前か午後のどちらかに出るように決められています。生徒数が少ない、または教室と生徒数のバランスが取れている学校は午前の授業だけです。午前の授業は朝7時に始まって、12時半に終わります。また、午後の授業は12時35分から5時までです。ただし小学校の1年生と2年生は朝8時に始まるのが一般的です。

クリスチানের学校については詳しくはわかりませんが、イスラム教の学校は金曜日は休みです。また、イスラム教やクリスチানের学校ではない一般の学校は、金曜日の授業が11時45分に終わって、午後は1時に始まります。なぜなら、イスラム教は金曜日の12時ごろ「ジュマ」のお祈りをするからです。これはインドネシアの政府により決められています。イスラム教の学校ではなくてもイスラム教の影響が大きいです。

インドネシアでの進学のシステムは日本とかなり大きな違いがあります。例えば、毎年5月と6月に卒業試験があります。小学校、中学校、高校の試験日は違いますが、それぞれ一斉に行われます。各小中高の試験問題は同じで、これはインドネシア教育省が作っています。その試験結果は中高に進学するときの基準として使います。その結果がよければ、一流の中学校や高校に入れるというわけです。国立学校は求められるレベルが高いですが、私立学校は国立学校に比べて低いです。

インドネシアの教育にかかわる問題ですが、まず、特に田舎では、「高いレベルの学校に行かなくてもいい、字を書けたり読めたりするだけでも十分だ」という考えを持っている人がまだ多いです。この

ような考えの背景になるのは彼らの周りに高いレベルの学校の卒業者がいないということがあります。そして、大学を卒業しても仕事についていない人が多いです。また経済的な問題もあります。これが一番大きな問題です。

インドネシアは1996年に経済危機で揺れました。その時、大幅なリストラが起きました。その結果、学費が払えなくなって、中途退学した生徒や進学できない生徒がかなり増えました。今でもこの不況は完全にはまだ回復していません。最近、学校に行かず、親を手伝って稼ぐ子供が増加しています。政府は奨学金によって援助していますが、「学校に行かない生活」を楽しんで、もう学校に行きたくないと思う子供が少なくないです。このように小学校に行かない子供が増えていますので、インドネシアのある地域では生徒不足の国立小学校があるほどです。

その他、学校内外の問題としては、別の高校の生徒同士によるけんかや暴力事件です。このようなけんかをインドネシア語では「タウラン」と言います。また、もっと深刻な問題があります。それは日常的に麻薬を使用している学生が増えていることです。この問題に対しては、一番大きな責任が両親にあるとする意見や、麻薬使用や売買に関する法律が弱いというさまざまな意見が出ています。

そこで、インドネシアでは、自治権が回復すると、同時に、カリキュラムや教科書などの教育に必要なものは中央政府ではなくて、その自治委員会が決められるようになりました。また、インドネシア教育省は今のカリキュラムや教科書や教師を重要視している憲法を尊重して、教育制度を改善するための委員会を作りました。この委員会によって、将来のインドネシア教育制度はよくなるということが期待されています。

ベトナムの学校制度.....経済学部1年生 レコック・ユイ

ベトナムの学校制度は日本と同じところもある。違ったところもある。

学校に行く日数は週に六日間である(月曜日から土曜日まで)。授業は午前の授業と午後の授業に分かれる。午前の授業を受ける生徒は午後の授業を受けられない。逆に、午後の授業を受ける生徒は午前の授業を受けられない。午前の授業は朝7時から昼11時半まで、午後の授業は午後1時から5時半までである。ベトナムは熱帯国だから、年中暖かい、特に昼から夕方まで非常に暑いので、最近、午後の授業がだんだん減ってきた。

学校に入る前に、幼稚園がある。幼稚園に行くか行かないかは、すべて父兄が決める。幼稚園の対象は3歳から5歳までの子供たちである。また、学校と違って、幼稚園は朝8時半から午後5時半まで開いている。

ベトナムの小学校から高校までの期間は12年間である。ただし、小学校と中学校の期間は日本と違う。ベトナムの小学校は5年間である。小学校に行くことは強制されている。小学校の入学の対象になるのは6歳から7歳までの者である。しかし、大部分の人は6歳で入学する。なぜかというと、ベトナム人は先輩と後輩というものをあまり重視しないで、年齢のほうを非常に気にするからである。7歳で入学した場合、小学生の間は、まだ大丈夫だが、中学生、高校生になると仲間外れになってしまう。中学校は4年間、高校は日本と同じ3年間である。高等学校に行かない人は高等専修学校に行ける。高等専修学校の対象は中学校を卒業した人である。普通は、高等専修学校は3年間だが、3年間の学校もある。

ベトナムではさまざまな理由で、学校に行きたいが行けない人の数は少なくない。こういう人のために、補足学校という学校もある。補足学校は日本の夜間学校と同じようなものと考えてもよいが、補足学校は昼間に授業をする。補足学校といっても小学校補足学校、中学校補足学校、高校補足学校に分かれる。また、だれでも補足学校に入れる。基本的に補足学校を卒業した人の資格は一般学校を卒業した人の資格と同じである。また、高校補足学校を出た人は一般の大学を受験することもできる。

ベトナムの専門学校というのはもっぱら職業のことを教える学校である。修学期間は決まっていなくて、職業の能力を習得すると卒業する。専門学校の対象は18歳以上、学歴を問わない。

短期大学は主に職業のことを教えるが、職業のことだけではなく、ほかのことも教える(歴史なども

教える)。短期大学の対象は高校を卒業した者である。短期大学は2年間である。

ベトナムには、専門学校と高等専修学校は多いが、短期大学と大学は少ない。

一般の大学は4年間である。しかし、ベトナムの大学と日本の大学のあり方はまったく違う。日本では勉強科目によって、クラスを分ける。ベトナムでは、大学も小中高等学校のように、最初からクラスが分けられる。ベトナムの大学は日本の大学より授業科目も選択の自由がないので学生は受け身の立場で授業を受けなければならないと言える。

大学院に行く人は減ってきた。さまざまな原因が考えられるが、要するに、生活のため、みんな就職する。また、国内の大学院に行かず、海外の大学院に行く人が多い。

ベトナムの教育および学校のあり方：学校設備は古い(1960-1970年代ぐらい)、教科書の内容は時代遅れ、フランス植民地時代から(100年前ぐらい)あまり変わらない。

教科書：ベトナムでは教科書の出版社はたった一社である。この出版社は文部省の教育出版社という出版社である。

大学の問題：クラスは最初から決まっているから大学生は受身の立場に立つ。

クラスの雰囲気：先生らしい、学生らしい。先生と学生の関係は親切である。

いじめ問題は日本のいじめ問題と違う。高校、大学ではいじめ問題がないといえる。小中学校ではあるが、自殺、お金を巻き上げるまでは行かない。

私立大学また短期大学、専門学校、補足学校、高等専修学校などの出身の人たちは、社会で区別されている。

中国の教育制度……………工学部1年生 于 金平

1949年、中華人民共和国が成立して以来、中国政府はずっと教育を重視してきた。国家が教育についての法律を多く制定し、いろいろな角度から人々の教育を受ける権利を保障し、中でも特に少数民族、児童、女性と障害者などの教育を受ける権利を保障した。50年にわたって努力を積み重ねた結果、中国の教育はより完全な制度になった。

中国教育制度は、基礎教育と中等職業教育と普通高等教育または成人教育の合わせて4つの部分で構成されている。以下に、主にこの4つの部分を紹介したいと思う。

まず、中国では、学前教育と普通初等、中等教育を合わせて基礎教育という。日本の学校制度と比べると、学前教育は幼稚園に相当し、普通初等教育は小学校に相当し、中等教育は中学校と高校に相当する。中国は1986年から普通初等、初級中等教育を普及しようと努力してきた。皆さんも多分ご存知と思うが、中国の人口はもう13億を超えている。このような莫大な人口で普通初等、初級中等教育を普及するには、かなりの金銭と時間が必要だ。しかし、中国の人々は、様々な困難を越えて、普及に努力した。10年ぐらいの時間をかけて、1999年までに、全国に小学校が58.23万校あり、在学している学生が1364.96万人いる。全国で児童の入学率は99.09%に達している。全国的には、もう人口の91%に当たる地域で小学校教育が普及している。小学生が卒業した後の進学率は94.3%に達している。初級中等教育も相当に発展してきた。

中国の基礎教育は小学校、中学校、高校の3段階に分かれていて、合わせて12年である。小学校には5年制と6年制があり、前者は小学校の36%を占め、後者が小学校の64%を占めている。中学校では3年制と4年制がある。小学校と中学校合わせて9年で「義務教育」と呼ばれている。

次に中等職業教育を紹介する。中等職業技術教育は主に普通中等専門学校、技術工学校、職業中等教育、および様々な短期技術教育によって構成されている。高校段階の職業技術学校の在学生と高校の在学生の数の比率は1980年の18.9%から1999年の56.47%に増えている。これは、中国の社会環境の影響で、高校に入るより、早く一つの技術を身に付けるほうが良いという考え方が優勢である結果だと思う。競争がますます激しくなってきた中国では、こういう状態が続く可能性は非常に高い。

次は普通高等教育を紹介する。普通高等教育は短期大学、大学、大学院等の高等学歴の教育を指している。高等教育の中で、短期大学学制が2-3年、大学学制が一般に4年、医科が5年である。この他、

少数の5年制の工科院校がある。研究生学制が2－3年、博士研究生学制が3年である。日本と比べて、大体同じである。しかし、ここで述べておかなければならない点がある。それは、中国の大学では履修選択制がない。つまり、指定される科目はすべて必修科目として履修しなければならない。この制度はいいとも悪いとも言えないが、今中国で強く批判されている。私は中国の大学で勉強したことがないけれども、大体想像できる。この点について後で皆さんの意見を聞きたいと思う。ところが、中国の大学と日本の大学には履修制度での違いがあるが、生じる問題は極めて似ている。例えば、学生が遊んでばかりで、全然勉強しないなどの問題である。私は、この種の問題がアジア諸国で共通の問題だと思う。調査もしないでこのような話をするのは危ないが、一応アジア諸国の友だちと話したときに、確かにこのような問題が存在していることが確認できた。では、一体なぜこのような事態になっているのか、皆さんと一緒に検討したい。

最後に中国の成人教育を紹介したい。成人教育は成人を対象として行う学校教育、文化普及教育と他の形式の教育から構成されている。この成人教育の目標は、一旦何かの原因で学校を中退して、勉強できなくなった人や、以前から全然教育を受けなかった人や、また以前に受けた教育だけでは足りないと感じている人などに、もう一回勉強するチャンスを与えることである。

以上、中国の教育制度の概況を紹介した。

◇「留学生センターと国際交流の将来」についての懇談会

会 場：信州大学理学部大会議室（理学部新棟2階）

日 時：平成14年3月9日（土）13時30分～17時30分

出席者名簿（敬称略）

筑波大学	留学生センター長	黒 田	誼
群馬大学	留学生センター助教授	牧 原	功
東京学芸大学	留学生センター長	加 藤	清 方
東京農工大学	留学生センター長	越前谷	明 子
一橋大学	留学生センター講師	西 谷	ま り
富山大学	留学生センター長	小 島	満
岐阜大学	留学生センター長	堀 内	孝 次
静岡大学	留学生センター長	本 多	隆 成
名古屋大学	留学生センター教授	野 水	勉
三重大学	留学生センター長	手 塚	和 男
神戸大学	留学生センター助教授	實 平	雅 夫
岡山大学	留学生センター教授	岡	益 巳
広島大学	留学生センター長	浮 田	三 郎
早稲田大学	国際教育センター所長	内 田	勝 一
南山大学	国際教育センター副センター長	坂 本	正
信州大学	留学生センター長	内 藤	哲 雄
信州大学	事務局長	高 石	道 明

プログラム

信州大学村山副学長挨拶

基調発表：3大学の現状と今後の取り組み

1. 筑波大学の概要

留学生センターの組織と業務
課題

筑波大学留学生センター長 黒田 誼教授

2. 富山大学の理念・基本目標・中期目標・中期計画と留学生センターの対応

将来構想

富山県内国立大学・短大の再編統合と留学生センター

国際教育研究センター構想

富山大学留学生センター長 小島 満教授

3. 早稲田大学国際化の課題

留学生受け入れ・派遣の現状

国際交流の組織

今後の課題

早稲田大学国際教育センター所長 内田 勝一教授

注：基調発表の詳しい内容については信州大学留学生センター発行の『信州大学留学生センター主催「留学生センターと国際交流の将来」についての懇談会報告書』を見てください。

討 論

1. 理念・機構の再構築
2. センターの役割拡大と学内組織の関係
3. 事務官の役割と育成
4. サービスの品質管理・外注化
5. 短期プログラムの新しい方向
6. 地域貢献
7. センターの運営とセンター長の立場

信州大学村山研一副学長挨拶

信州大学に留学生センターができたのは3年前で、必ずしも先発ではなかったが、大学における国際化の動向を見ていると、一番大きく変わったのは1980年代の半ば頃からでないかと思う。そのころから日本国内の外国人の数が増え始め、留学生も増えてきた。大学もその対応に追われ、次第に留学生プログラムも充実し、留学生センターも1990年代から作られるようになってきた。

日本社会の国際化が始まって20年弱経過したが、現在の国際化の動向等を見ると、当初のころとは違って、例えばグローバルイゼーションという言葉が使われるように、まったく質の異なったものになっていると思う。1996年に設立されたWTOなどは非常に象徴的なものであり、日本の経済とか社会とかを国際標準に合わせる、あるいは国際標準を意識しなければならない、という状況になってきた。日本の大学教育に色々な批判があることは承知のことであるが、特に国際比較をした場合、そのパフォーマンスの低さはしばしば指摘されていることである。留学生を迎えるにしても、留学に値する教育を果たして日本の大学は行っているのかどうかということが厳しく問われている。このような課題に留学生センターが応えることを期待するのは、少し荷が重過ぎる、とは皆さんの率直なご意見かとは思いますが、しかし、留学生センターがひとつの起爆剤になって、日本の大学教育を変えていく。そういう期待を持っている。

信州大学も来年度から留学生センターを始めとした国際交流体制を見直して、より充実したものにしていきたいと思っている。本日の懇談会で参考になるさまざまなご意見が出されると思うが、本学もそ

れらを参考にしつつ留学生センターをよりレベルアップして行こうと思う。この懇談会の成果が明日の大学の教育改革につながることを期待して止まない。

討論：司会者信州大学内藤教授

1. 理念・機構の再構築 ～学内の国際交流全般を掌るセンターへ～

最初に、信州大学で作った「留学生センターと国際交流の将来」という資料の「機構・理念の再構築」のところをご覧頂きたい。個々の大学が全学的に教育や研究をどう国際化していくか、戦略化していくか、これが我々の生き残りのための大きい課題である。学生の受け入れと送り出しは、教員の派遣・受け入れとセットで考えるということは私学ではすでに当然のこととされているが、国立ではそうではない。これではいけないと、富山大学の小島先生から指摘があった。関連して、外部評価の問題や中期目標・計画立案が、学部だけでなくセンターにも求められる。法人化されれば、中期目標だけでなく、短期のものあるいは長期のものも出さなければならない。今から検討を始めてもギリギリ間に合うかどうかという時期である。このような点についてご意見を頂きたい。

A：今日ここに参加して非常に参考になった。来た甲斐があった。信州大学で作った資料に示されたさまざまな課題は勿論であるが、本学にも富山大学のような国際教育研究センターの構想がある。最近取り掛かったばかりであるが、富山と同様に留学生教育や学習指導だけでなく、学内の国際化、研究連携の推進、地域の国際化推進支援などを包括的に行う組織を考えている。現在の留学生センターでは対応できないので、そのような観点から組み立てなおす必要がある。ただ、学内の事務組織が留学生関係と研究連携などが分かれているので、これらも一体化する必要がある。このようなことを早急に考えなければならないと思う。

B：国際交流の学内拠点化を図らなければならないという点は、同意見である。そうなれば留学生センターという名称ではだめであるという点でも一致する。本学でも、国際交流センター構想が具体化したので、文部科学省と相談したが、文部科学省は「留学生センターの名称は省令で決まっている。」「名前を変えるようなことは出来ない。」と言って、概算要求は受け付けられないと、蹴られてしまった。皆さんの大学でも同じような構想が具体化すれば概算要求を考えるとと思うが、今の段階では文部科学省は絶対に「うん」と言わない。

C：本学も予備折衝で断られた。法人化すれば同じような構想で突っ走るところが相当あることが判った。

2. センターの役割拡大と学内組織の関係

A：最初に東大ほか2校に留学生センターが作られて以来の問題が、センターの役割をどうするかということであった。ある大学では、学内向けには国際交流センター・文部科学省向けには留学生センターの2つの看板を使っている。本学で現在進行している構想は、全国共同利用の海外子女教育センター、留学生センター及び教育実践センターを統合して、50人規模の国際教育センターを作ることである。できれば付属学校をそこに付設して、初等中等教育から高等教育までの国際教育を考えようというものである。

B：大幅に改組しようとしている大学では相当数の定員を配置する考えのようだが、学内でどのように措置するのか。

C：本学の場合は、大部分は旧教養部の語学系教官を現在の所属する学部から配置換えでやろうとの計画であった。

D：本学は、教員養成でないいわゆるゼロ免課程があるが、将来は教員養成に特化して行くこととし、ゼロ免課程の教員定員を新しいセンターに使うことが考えられている。

E：附属学校を抱えているところは、それらを統廃合しようとする話もあり、その人的・物的資産を使うことを考えているところもある。教育学部の統廃合の先行きはまったく読めないが。

F：南山大学では、国際教育センターという名称のもとに、学生の送り出し、受け入れ、それらに対す

る、支援をすべて担当している。センター長は副学長で、3人の副センター長が職務を分担している。3人の一人は事務官である。教員の交流は担当していない。

- G：早稲田の組織はこれまでいろいろ改変をしている。国際教育センターになったのは1998年である。それまでは、学生交流担当、教員の交流担当、国際部の3つに分かれていた。さらに新しい留学生プログラムを企画するセクションが学務部にあった。これらを、教員の交流を除きすべて、センターに統合した。規模の問題から、教育の部分と研究の部分は統合するのは難しい。研究者の交流は国際課が担当である。
- H：全学的な国際センターとなれば、交流協定の締結にも関与することになるだろうが、大学間の協定とはいっても、学部が主体になっていて、それに外から口を出すことは大問題であるという意識がある。学部でも、交流は個人中心で、その人物がいなくなるとつぶれてしまうような交流が多い。そんなことを全部センターが引き受けたらひどいことになるという発想もある。
- I：国際交流の経験のあまりない学部に対して、情報を提供し企画を助ける役割を果たしていくのかなと思う。

3. 事務官の役割と育成

- A：協定締結の申し入れは多いが、対応を学部にいちいち返していると、複雑なことになる。できるだけ単純化しようという方向に動いている。しかし大学全体で窓口をひとつにしようとしても、国際交流課が本来その役割を負うべきだが実際には何もしていない。英語ができる人が限られているので、ほとんど学部に分けるだけで、自分たちで交渉することはない。センターがサポートすることで、今まで以上にレベルの高い大学との協定がどんどん結ばれるようになってきている。留学生センターの国際交流に対する貢献は、この面でも高く評価されるようになってきている。
- かつては、部局間協定の実績を積み上げて全学協定にするのだという論理で、なかなか大学間協定を結ばせてくれなかったが、学生交流が盛んになると考え方が逆転して、むしろ全学協定をしっかりと管理することが重要だと思う。本学では、センターが中心になって、3～4年前から協定締結の条件とシステムを確立してやってきた。最初は、センターに全学協定を結ぶ資格はないと、資格問題まで言われたが、副学長や総長に談判してやれることになった。早稲田のように、事務部が協定締結を担当し、教員はそれに携わることはないという体制は、国立大学も学ばなければならない。
- B：国際交流のスタッフの整備、マネージメントがちゃんとできる人材を育成しないと、大学全体の国際化や国際競争の中で生き残ることが極めて困難になる。教員は当然であるが、事務方の意識改革や能力開発もやらねばならない。
- C：南山大学ではセンター長が国際担当の副学長で、副センター長の一人が事務員でその下に3人つけている。交流協定はすべてセンターでやるので、学部には一切迷惑はかけない。去年は、事務のひとりにアメリカでPh.D.をとったものを採用し、事務のほうもなるべく専門的にしていこうとしている。
- D：国立大学では、事務官の人事異動があるが、私学では固定的に専門家として配置できることが大きい違いである。また、国際交流委員会のメンバーが各学部から選ばれてくるが、いい人が来れば仕事が格段に進むが、そうでないことも多い。
- E：本学では、初めて昨年女性の事務官が1年間アメリカに研修に行って、まもなく帰ると思う。帰ったら研究協力課に配置されると思うが、3年ぐらいしたら異動になってしまう。留学生問題だけでなく、就職でも同じで、私学では一貫して就職支援を担当して、企業とも密接につながりを持った人がちゃんという。法人化の暁にどうなるのか。真剣に考えねばならぬ。
- F：適性がない事務官が高いポストに来ると、めっちゃめっちゃ裏返しになることがある。8年間の経験では、長くいても例えばセンターは伸びると思う人と、そうでない人は半々である。いなくなってほしいという人もいるので、人事異動は害ばかりではないとも言える。

- G：異動するとしても、関連の近いところで動いてもらうという方法もある。
- H：大学採用の異動の少ない事務官も含めて、本省の人間もCDPキャリア開発が重要。現在は、キャリア官僚のミニチュア的な、何でもできるが何もかも不十分ということになりかねない育成の仕方である。一方で、大学を出て当面職がないという人材を使ってパートタイムで対応できることもある。工夫してとりあえずやっておいて、法人化したら一気に採用方針を変えることができるかもしれない。
- I：英語のできる人を謝金で雇って、窓口に置いたら留学生センターの評価が高くなった。しかし、肝心なのは上に立つ人なので、ちゃんとした訓練システムと評価システムが必要。留学生の仕事はある意味で新しい分野であり、ある程度きちんとした考えがある人でなければならない。大変難しい職場だと思う。
- J：国際交流課とか国際企画課となるともっと事務官の能力が問われることとなる。そのために育成された人はほとんどいない現状である。当面は、教官の中から適任者を確保して何とか回していくというのもひとつの方法だと思う。
- K：アメリカの大学図書館には、図書館学でPh.D.を持っているのがいる。
- L：アメリカに留学したとき、受け入れ担当の事務官は相当のエキスパートという感じだった。
- M：去年の暮れに信州大学の事務官から、桜美林大学の大学管理者養成のマスターコースに行きたい者を募集した。1人だけ応募があり、合格したので東京農工大学に転勤を受け入れてもらった。そういう高度の訓練を受けた者が大学管理の中核に在るべきである。古い体質で育った者がまだ多いので、時間はかかるが。

4. サービスの品質管理・外注化

- A：事務の外注化はもちろんであるが、日本語予備教育は外注化されるのではないかという議論は、現場の教員の間で実は真剣になされている。実際問題として、留学生が多い国立大学のセンターでは、ほとんど非常勤が教えていて実質外注しているようなものだ。専任教員はマネジメントに徹している。
- また、教育事業の多角化で、日本に来て日本語を学ぶことを主目的にした学生向けの1年以内のコースを提供することも考えられる。外国では、英語や韓国語のコースを設けている。法人化すれば、3ヶ月や1ヶ月のコースも作られる。そうすると、恐ろしい競争が始まる。一生懸命、コースと大学の魅力を売り込んで学生を獲得する競争になる。この意味で、品質管理が重要になる。企業でまず品質管理のQC運動が起きて、それがTQCに変わる。品質管理がトータルになったとき、サービスの品質管理ができるようになる。我々のやっているFDなどは企業では30年前からやっている。品質管理の外注化ということも出てくると思う。ファミリーレストランのトイレの入り口にあるタイムレコーダーのようなものは、トイレの清潔度の品質管理法である。葬儀社のマニュアルには、お辞儀の角度、霊安室から送り出すときはどの角度でなどというのがある。留学生から声をかけられたら、ちゃんと真正面から学生のほうを向いて対応してあげるとか、そういう気持ちの面も含めて、いろいろな面の品質管理があると思う。
- B：アメリカで10年ほど教えていて、日本のいろんな大学へ学生を送り込んでいた。ATJという日本語教育教師の団体があって、年次大会のパーティーとかその2次会に行くと、どこの大学に送った学生がどういう力をつけて帰ってきたか、という情報が豊富に得られる。特に短期プログラムの場合は、最初の2～3年が勝負だといわれる。ある程度勝負が決まると、勝ったところにしか学生を送らないということになる。非常に厳しい。
- C：世界中の大学の共通のキーワードが今や「Quality Assurance」品質保証である。WTOも高等教育の流通性を議論の俎上に乗せている。各国の高等教育が規模を拡大してきたということもあるが、流通性の拡大が品質保証を求めることにつながっていると思う。

5. 短期プログラムの新しい方向

A：短プロで、学部の授業の内容に対する評価は深刻である。日本語教育が一番充実していて良かったという人が多い。ついで日本事情などの授業。専門の授業は概して評判が悪い。特にアメリカの学生はきちっと管理された教育プログラムに慣れているので、ディスカッションもなく、やりっぱなしで最後に授業評価を求められ、学生の理解度を無視して授業をやっていることに対して、非常に批判的である。日本の大学教育全般に対して言われていることでもある。改善の努力はしているが、FDだけではなかなか教員の意識は変わらない。

品質管理ということでは、きちんとした教育内容を作り、明確な評価基準を作ることが重要。評価にしても、A,B,CのAに大体80点から100点を位置づけているというのは日本ぐらいのもの。先生によってはほとんどの学生にAをつけるし、ほかの先生は特別でないとAはつけない。評価制度がばらばらで、単位を持ち帰ってもらう際に信頼度が全然ない。もう5～6年やっているが、最初ひどくけなされた。英語でやる授業を増やすことも今の国立大学ではなかなか出来ないで、ある程度が概論的な授業を中心にし、足りないところは指導教官に補ってもらう。アメリカから来る学生には、事前にそういう方針を理解してもらう。学生のほうも本当に専門を勉強して帰るというより、むしろ別の目的が十分達成されれば、それでよからうということで現在は短期プログラムを動かしている。ただし、将来は是非日本の大学教育のレベルに根本的な構造改革が必要だと思う。

B：短期プログラムの一部を外注することも可能ではないか。例えば、日本の企業の経営の実態とか、実践的で生々しい現場の中で、企業の人にしゃべってもらえば、どんなにたどたどしい英語でも、中身が面白く、学生は興味津々で大喜びすると思う。その意味で、内容とか構成の企画力が勝負になる。

C：非常勤の予算を獲得することが肝心だが、本学では、学長や副学長と談判して獲得する。カリキュラムは、座学を少なくしてフィールド研究科目を多くしている。出版社に連れて行くとか、江戸時代の地図を持参して、江戸屋敷の跡を訪ねるなど、こういう授業が喜ばれる。できるだけ体で日本を体験させる。

D：おっしゃるとおり、非常に面白い内容なら、日本語の説明に通訳をつけてもいいし、そもそも日本語で説明しても面白いかどうかは問われていると思う。以前本省の留学生課長に話をしあまり関心をもたれたわけではないが、日本の大学が英語で短プロを提供しているように、例えばマレーシアやタイで、それぞれの国の歴史や文化などを日本語で教えてくれる授業をやってくれたら日本からの留学生がもっと行くのではないかと、思っている。向こうにも日本語の教師がたくさんいるので、こういう制度ができれば、学生は向こうであちらの言葉も勉強してくる。交流がもっとしやすくなると思う。

E：そういうことを考えるなら、大学のコンソーシアムでやるという方法が良いと思う。1大学では学生を多く集められないだろうから。こういうことにODAを使えばよい。

F：欧米諸国には行きたい学生がいるが、アジア諸国の大学へはなかなか行きたがらない。一方通行の交流になってしまう。そういう状態を打開するためにも良い方法だ。

G：今の話のように、アジアの国へ送り出すことを考えると、日本語で勉強ができるということは、そのうちその国が好きになってその国の言葉を覚えるようになるという意味で、良いことである。ネットワークを組んで人数を集めて送り出すという制度を作らないと、アジアとの交流はできない。

H：本学では初めて今年度正規の短プロで、14名の学生を送り出した。12名は英語圏へ、2名がタイへ行った。もちろんタイ語はまったくできない学生で、英語もそれほどではなかったが、行ってみたというので派遣した。今年の夏に派遣する中にはアジアの国の希望者はいないようだが。

I：2年前に作った総合政策学部では、必修科目として、韓国、インドネシア、台湾などアジアの5カ国のどこかに3週間行って向こうの言葉を勉強して帰ってくることを義務付けた。それを契機にもう少し勉強したいという学生も出てきている。必修にするなど縛らないとなかなかアジアの国には行かない。

J：短プロの狙いは、リピーターの獲得だと思う。教育事業の多角化に関連するが、国費留学生の予備教育がセンターのメインの仕事だった。しかし、国費留学生は減少する。設置直後はたくさんよこしても、国費留学生全体の人数が10万人計画の中で最高到達点に達しているの、センターの数が増えれば、それだけ個々のセンターに来る国費学生は減ってくる。学生がこないから授業をしなくて良いとなると、センターの教員は何をしているのだということになる。本学では、私費留学の研究生や、日本語ができなくても良いと思っている大学院生などを半年間預かって、日本語の初歩を教える。そうすると、日本語で挨拶ができるようになるだけでうれしくなって、日本語を覚えようとする。こういう形で学部や研究科の教育に貢献していれば、センターの活動に対する反対意見は出なくなる。

6. 地域貢献

A：国際理解セミナーなどというものはどこでもやっていると思うが、要するに学部がやっている公開講座のようなものをセンターでもやらねば、との考えでやっている。留学生に謝金を出して、日本語で母国の様々のことを市民に話してもらって、地域の国際理解増進に役立てる。地域貢献では、地域行政のアドバイザーというものもある。市も外国人に住みやすい町にするための助言を留学生に求めたりする。センター長も来てアイデアを出してくれというから、そういう機会には積極的に協力している。地域貢献も評価の対象になるので、重要である。地域振興の面では、外国の製品を売ったり食事を出す店を作ることによって地域振興を図るというようなことにも、協力できるかもしれない。大地震が起こったとき、集合場所を示す表示があるが、それらを外国語で書くとかという点などでも協力できる。留学生を食事に呼んだり催しに呼んだりすることはよくやるが、サービスされるだけでなく彼ら自身も何かしたということを欲しいと思っている。そういうことができれば本来の意味で地域交流・貢献ができたということだと思う。そういうことが留学生センターの評価につながっていく。同じ意味で、日本語教育のボランティアとの連携、ボランティアに対する教育法の指導などという面でもセンターの役割はある。

7. センターの運営とセンター長の立場

A：本学では、学内委員会の半分にセンター長がオブザーバーで入っているが、評議会には参加していない。たまたま学部の教授でもあるから、全学的な動きは教授会で聞いているのでセンターに伝えることができるが、センターの専任教員がセンター長をやっていたらいったいどうなるのかと思う。

B：本学はセンター長が教授会にオブザーバーで出ている。評議会には、もともと共同教育研究施設の長は陪席できるという制度はあったが誰も行使したことがなかった。私が初めて行使するというので、事務局は慌てて規則を調べたようだが、2年間毎回陪席した。発言権はないが、出席していれば大学で起こっていることは良くわかる。こういうことは専任のセンター長になっても絶対必要である。

また、制度が変わって、学内共同教育研究施設にも教授会あるいは教授会相当のものを作ることができることと明記された。阪大や北大など大きなところは教授会を作っている。九大は教授会相当の位置づけで作っている。本学のセンターは8人の専任教員がいるので、教授会相当のものを作ろうと1年間戦ってみたがまったく話にならなかった。

C：うちでは、5名の専任教員だが、運営委員会が教授会相当の機能を果たしている。

D：それは認識が違って、運営委員会が教授会と同じ機能を持つということと、教授会あるいはそれに相当するものを作ることは、制度上別のことである。法律上、運営委員会とはまったく違う機能を持った組織として作られるものである。センターの専任教員はもちろん外部の教員がいてもかまわない。専任のセンター教員の数の下限はない。

E：センターの教員だけで構成される教授会の人事委員会が教員採用をすべて決めることができるのは、怖いことだ。センター内部の人間に嫌われたら、絶対に昇進できない。

- F：センター内部の教員だけで作るのは大変危険である。外部の教員を入れるとしても、その権限をはっきりと決めておかねばならない。が、現在のような運営委員会では、まったく何の力もない。センター長が報告して、学部の代表は何も発言せずそのまま持ち帰る。センターに教授会相当の機構を作ること、センターの独立性が確保される。センター所属の学生や研究生を持つ、あるいは協定を結ぶ権限を持つなど、センターの運営組織をきちんとすることでクリアできるようになると思う。
- G：学部と同じように学生を持つということは簡単にはできない。持っているといってもそれは預かっているだけではないか。
- H：留学生の一部は完全にセンター所属である。教務委員会のようなものもセンターにはある。
- I：センターの教員が設置審の審査を受けなくて、自由に採用できるのは、教育機能を持たないからである。
- J：例えば新しい独立専攻などができるときに、センターの教員が一人一人参加して、設置審で審査を受け、大学院で教える資格をきちんと取って行くような積極的な姿勢が望まれる。本学ではひとりだけが大学院の独立専攻で教えられることになった。センターが部局になればまた事情は違ってくるであろう。
- K：おっしゃるとおり、センターの教員もマスターくらいまでは適格者になれるように常に研究業績を挙げる努力をしないと、学内でも立場が苦しくなると思う。センターには業績を挙げることを当然と思わない雰囲気がある。
- L：センター長の多くは、学部という大変強く、確固たる組織の一員でもあるが、そういう立場でセンター長をやるのと、脆弱な一学内施設の一員としてセンター長をやるのではまったく異なる。何をやるにも戦いで、サポーターをどれだけ確保しているかがセンターの存亡を左右する。しかし嘆いてばかりいても仕方なく、教育でも皆さんがびっくりするような成果をきちっと挙げ、研究も恒常的に出していくような姿勢がないと、いつまでも弱いままのセンターである。
- M：学部からセンター長が来た場合は学部がサポーターなのだが、敵になる人もいる。
- N：そういう危険性はあるが、センターの教員がセンター長になった場合、どこにサポーターがいるか。学長や副学長がサポーターになるかといえば、決してそうではない。彼らは見ているところが違う。
- O：本学のセンターの教員にも当初あったことだが、学部に負けないぞという気概はいいのだが、学部に命令したり通達してもいいんじゃないかというものも居た。私は黒子に徹することによって黒幕になると思っている。学部を巧妙に立てつつやる姿勢が必要で、対抗意識だけでやるとうまくいかない。
- P：学部も共同教育研究施設もそれぞれ固有の存在価値がある。与えられた仕事をちゃんとできる組織と人員と資金が与えられて初めて使命が果たされる。なにも学部と対抗してとか命令して達成されるものではない。
- Q：学部との連携は非常に大切である。それなしではうまくいかない。うまく行けば素晴らしいものになる。
- R：本学は遠隔地に学部が分散しているので、どこそこで後援会の集まりがあるといえば、自分の授業を休んでまでも出かける。日頃から足を運んでいるからこそこちらが頼むことにも応じてくれる。建前論で押すだけではだめだ。
- S：センター長はやはりその分を超えないことも必要だが、一方で元気よくセンターを引っ張っていくことも必要である。センターの内部からセンター長を出すことになれば、かなりの重荷を背負う覚悟がないと、なかなか難しいと思う。これが私の2年間の感想である。
- T：センターから長を出すには、その時期の問題があると思う。センターの立ち上げの時期は大変で、運営委員会にもセンターの教員に加えて、各学部から一人ずつと、さらに留学生担当の講師にも参加してもらって、できるだけ応援団を増やそうと努力した。また、学部代表でたまたま選ばれて来る教員には留学生問題に不案内な者もいる。それでは良くないので、学部の留学生委員会の委員長が必ず運営委員会に参加する体制を拡大しようとしている。そのようにして運営委員会を通じて話

を通じやすくする。そのようにいろいろやってみてある時期が来れば、専任教員もセンター長になれると思う。

U：学部でも全学のものでも委員会などのメンバーの経験がなくて、交渉したり、まとめるという訓練を受けていない人がセンター長になると多分うまくいかない。交渉力とか取りまとめる力が相当に必要で、内部にそういう人材を育成しておかないと、大学全体の動きと正反対の動きをすることにもなりかねない。

V：本学のセンターにも教授会を、という話は当然出ているが、運営委員会と教授会の役割がどう違うかという見極めがまだついていないので、現状では教授会設置の考えはない。仮に教授会を持ったとしても、センター長をセンターからという選択肢も排除はしないが、学部の支援のもとにやっていくためには、学部からセンター長を迎えるのが望ましいとは言っている。

W：本学でもセンターに教授会を作ろうということだったが、センター内部にはできなくて、各学部・研究科から一人ずつで11-12名、センターからは教授だけ4名(助教授・講師は入れない)のメンバーで構成した。ただし人事選考委員会はセンターの教授全員と外部の教員一人、そしてセンター長が委員長になるので、少なくとも採用人事に関してはセンターの意見が反映される。日常的なことに關して、学部の教員は詳しいことを知らないのでもそれほど揉めることはない。時々質問する程度。

X：上手に考えてうまくやらないと、いったん作れば廃止して作りかえるのはとても難しい。十分に情報交換をしていったほうが良いと思う。

平成13年度後期～14年度前期信州大学留学生センター活動記録

平成13年10月1日 平成13年度後期共通教育授業開始

10月1日 後期日本語補講開始

10月10日 第5期日本語研修コースオリエンテーション

10月12日 第5期日本語研修コース開講式

10月16日 第5期日本語研修コース授業開始

10月25日 平成13年度第6回留学生センター教官会議

10月29日 第1期日韓共同理工系学部留学生顔合わせの会

11月6日 第1期日韓共同理工系学部留学生予備教育開講式

11月19日 平成13年度第7回留学生センター教官会議

12月11日 留学生と日本人のための公開セミナー第1回 私の国の教育制度

12月14日 第5期日本語研修コースおしゃべりパーティー

12月20日 平成13年度第8回留学生センター教官会議

平成14年1月31日 平成13年度第9回留学生センター教官会議

2月4日 平成13年度第3回留学生センター運営委員会

2月26日 第5期日本語研修コース修了発表会

3月4日 平成13年度第10回留学生センター教官会議

3月6日 平成13年度大4回留学生センター運営委員会

3月9日 「留学生センターと国際交流の将来」についての懇談会

3月11日 研修コース・日韓共通理工系学部留学生予備教育修了式

3月15日 日本語補講修了式(会場：各キャンパスSUNS ROOM)

4月4日 平成14年度留学生ガイダンス

4月8日 第6期日本語研修コースオリエンテーション

4月9日 第6期日本語研修コース打ち合わせ

4月10日 第6期共通教育授業開始

4月12日 第6期日本語研修開講式

4月15日 第6期日本語研修コース授業開始

4月19日 平成14年度第1回留学生センター教官会議
4月30日 日本語補講担当教官会議
5月7日 平成14年度日本語補講開始
5月7日 平成14年度春学期短期留学生プログラム授業開始
5月31日 平成14年度第2回留学生センター教官会議
6月22～6月27日 日本留学フェア：インドネシア、マレーシア
7月4日 平成14年度第3回留学生センター教官会議
7月4日 平成14年度第3回留学生センター教官会議
7月5日 平成14年度第1回留学生センター運営委員会
7月5日 平成14年度第1回留学生担当教官連絡会
7月18～20日 ソウル市内日本語学校訪問、日韓共同理工系学部留学生事業合同留学説明会
8月2日 平成14年度第4回留学生センター教官会議
9月12日～15日 日本留学フェア：韓国（釜山、ソウル）
9月18日 第6期日本語研修コース修了発表会
9月20日 平成14年度第5回教官会議
9月24日 第2回留学生センター運営委員会
9月24日 第2回留学生担当教官連絡会
9月27～28日 全学留学生研修旅行(奈良)

交 流 事 業

留学生センターは共通教育「日本語・日本事情」、日本語研修コース、日本語補講の授業や隔地の学部訪問を通して直接に、また、各学部の留学生担当教官を介して間接に、相談・指導から日常の会話にいたるまで、学部・研究科留学生といろいろなつながりを持つように努めています。さらに、留学生センター談話室や国際交流会館で催すパーティや全学留学生研修旅行など、交換留学生も含め、信州大学で出会った全留学生と日本人学生・教職員との交流を深める機会を多くする工夫をしています。このような努力は大学内だけではなく、松本キャンパス近辺の小中学校、市町村さらに留学生支援のボランティア等が主催する交流事業への参加を呼びかけるとともに、その仲介役を積極的に行っています。

○留学生が交流活動

団 体 名	交 流 活 動 の 名 称
梓川村教育委員会	留学生と清祥難との集い
東信留学生ファミリーの会	新入留学生歓迎会
いけばなインターナショナル信濃支部	いけばなの会
山形村教育委員会	山形小学校国際交流事業
長野日中友好協会	日中友好キャンプ
松本留学生応援ファミリーの会	松本ぼんぼん
佐久商工会議所	留学生との交流会
長野市	長野びんずる
南箕輪村	マレットゴルフ交流会
千曲会・信州大学繊維学部	留学生との国際交流
松川村社会福祉協議会	国際交流会
塩尻市	国際交流まつり
長野県国際交流推進協会	留学生信州ふるさとフェスティバル
長野県留学生交流推進協議会	会員との交流会
伊那市・信州大学農学部	農学部留学生との交流会
信州大学工学部	長野地区留学生支援団体との懇談会
松本東ロータリークラブ	留学生日本語スピーチコンテスト
円福友の会	留学生に本を贈る会
松本ゾンタクラブ	留学生と日本の若き世代の交流会
長野県松本青年の家	みんな友達世界の仲間―国際交流
松本市本郷小学校	留学生との交流学習

○長野県留学生交流推進協議会

長野県留学生交流推進協議会は、長野県内における留学生の受入れの促進と交流活動推進のために設けられています。信州大学学長が会長を務め、県内の大学、高等専門学校及び専門課程を置く専修学校の長、県内の公的機関、経済団体、国際交流関係団体の長又は代表者によって組織されていて、信州大学学生部留学生課が庶務を行っています。

平成13年11月2日(金)に信州大学事務局第1会議室において、20機関・団体から、24名が出席して第13回総会・運営委員会合同委員会が開催された。

21世紀は国際化の時代であり、留学生交流は、大学及び地域の国際化を推進する上で、今後、ますます

す重要な施策となることが予想され、留学生交流をより効果的に推進するためには、大学等高等教育機関・民間・行政間の協力・連携が重要である。本協議会では、連携体制の整備・拡充のため留学生の積極的な受入れと優秀な人材の育成に向けた国際交流活動の一層の充実をめざして、有意義な会議としたという目標が、議長によって確認された。

○第12回留学生日本語スピーチコンテスト

松本東ロータリークラブが事業活動の一つとして留学生の日本語スピーチコンテストを毎年行っています。平成12年11月16日、ホテルブエナビスタにおいて7ヶ国10名の留学生が「10年後の私」、「ここが変だよ日本人」、「松本市は国際都市になれるか」の、三つのテーマでスピーチを行いました。一位は「ここが変だよ日本人」の陳嘉?さん（台湾、人文学部研究生）、二位は「10年後の私」の白旗サンドラ操さん（ブラジル、人文学部研究生）、三位は「松本市は国際都市になれるか」のレ・コック・ユイ君（ベトナム、経済学部1年生）でした。受賞者3名の発表内容が、信州大学留学生センターニュース第5号に掲載されています。

○『アジア賞』論文コンクール

松本ワイズメンズクラブが、留学生への学費援助のために『アジア賞』と銘打った論文コンクールをおこなっています。以下は、ワイズメンズ国際協会 松本ワイズメンズクラブが本年度長野県留学生交流推進協議会（上記参照）に加入され、同協会の機関誌『信州留学生交流』で述べられている文章からの引用です。

・・・1988年に長野県下に初めて誕生し、13年が経過しました。創立以来、YMCAが県下になくともあって地域奉仕事業は、施設の慰問や車椅子贈与などの事業を経て、3年前、信州大学在籍の留学生を対象に国際交流と資金援助を目的とした作文コンテスト「アジア賞」を設け、作文募集を行いましたところ、8名の応募がありました。その最初の最優秀賞受賞者は、韓国の朴貞雅さんでしたが、その後も交流が昨年の帰国まで続いており、更に受賞作品を読んだ行政側からの要請での講演やクラブブロック大会での講演などをして頂き、地域と留学生との輪が広がっていきました。おかげさまで昨年末、第3回を迎えた作文コンテストへの留学生からの応募総数は、57通で信州大学留学生の約5人に1人が応募され、その反響の大きさに喜びと共に責任の重大さを感じました。この事業には、信州大学の先生方や留学生課の方々に全面的にご協力を頂いており、偏に皆様のお力添えのお陰であると感謝申し上げます。

○信州の留学生に本を贈る会

藤本幸邦住職が会長を務めておられる円福友の会が、毎年、信州・新潟で学ぶ留学生から作文を募集して、それを冊子『留学生の思い』にして発行しています。平成13年度は57編の作文が、その1つずつに藤本住職が添えられた親切丁寧な評とともに掲載されています。また、円福友の会は、信州・新潟の留学生に本を贈る会を主催して、毎年、信州・新潟の留学生に1万円相当の希望申し込み図書を贈っています。平成13年度は、信州の留学生に本を贈る会によって、256名の信州大学留学生にそれぞれの希望する図書が贈られました。『留学生の思い』第13集の「巻頭のことば」には、ご住職が留学生に期待されている国際交流や国際協力の推進に、教育が果たすべきことの重要性が述べられています。

○留学生との交流会：梓川村教育委員会

梓川村教育委員会・梓川村公民館では、今年度2回、公民館事業として「留学生との交流会」を開催しています。この事業は、信州大学の留学生との交流を通じて国際的視野を広めることを目的に行っており今年でそれぞれ十数回と歴史のある事業になっています。（『信州留学生交流』第12号から）

○恒例の日中友好キャンプとスキーで親睦深める：長野県日中友好協会

長野県日中友好協会では、毎年信州大学の中国留学生の皆さんをお招きして、夏の日中友好キャンプと冬の日中友好スキー交流会を行い、親睦を深めてきました。キャンプは38回、スキーも25回を数えます。（『信州留学生交流』第12号から）

資 料

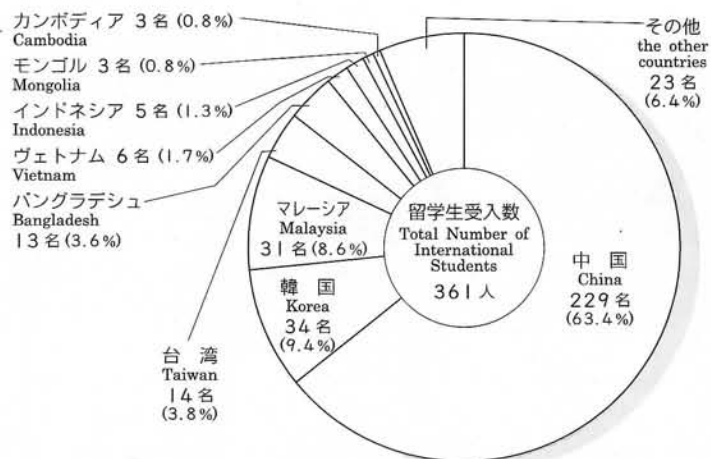
留学生数

平成14. 5. 1 現在
As of May 1, 2002

区 分 Classification		国 費 Japanese Government Scholarship			政 府 Government Scholarship in a Student's Country			私 費 Private Expenses			合 計 Total		
		男 Male	女 Female	計 Total	男 Male	女 Female	計 Total	男 Male	女 Female	計 Total	男 Male	女 Female	計 Total
学部学生 Undergraduate Students	人文学部 Faculty of Arts							4	7	11	4	7	11
	教育学部 Faculty of Education								1	1		1	1
	経済学部 Faculty of Economics		1	1				40	38	78	40	39	79
	理学部 Faculty of Science								1	1		1	1
	医学部 School of Medicine							1	1	2	1	1	2
	工学部 Faculty of Engineering	3	2	5	15	3	18	26	2	28	44	7	51
	農学部 Faculty of Agriculture							2	4	6	2	4	6
	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology	1		1				4	1	5	5	1	6
	計 Sub Total	4	3	7	15	3	18	77	55	132	96	61	157
大学院学生 Graduate Students	人文科学研究科 Division of Arts							3	5	8	3	5	8
	教育学研究科 Division of Education							3	5	8	3	5	8
	経済・社会政策科学研究科 Division of Industrial and Social Studies							1	2	3	1	2	3
	医学研究科 Division of Medicine												0
	修士課程医科学専攻 Master's Program in Human Sciences												
	博士課程 Doctor's Program	3	1	4				17	25	42	20	26	46
	工学系研究科 Division of Science and Technology												
	博士前期課程 Master's Program	3	2	5				22	9	31	25	11	36
	博士後期課程 Doctor's Program	10	6	16	1		1	14	4	18	25	10	35
大学院学生 Graduate Students	農学研究科 Division of Agriculture	4		4				10	7	17	14	7	21
	岐阜大連合農学研究科 (博士課程) The Joint Graduate School of Agricultural Sciences, with Gifu Univ.	3	2	5				6	2	8	9	4	13
	計 Sub Total	23	11	34	1		1	76	59	135	100	70	170
	研 究 生 Research Students	3	2	5				13	8	21	16	10	26
聴講生, 科目等履修生 Auditors and Credited Auditors								1	7	8	1	7	8
合 計 Total		30	16	46	16	3	19	167	129	296	213	148	361

■国別外国人留学生受入数

Number of International Students by Nationality

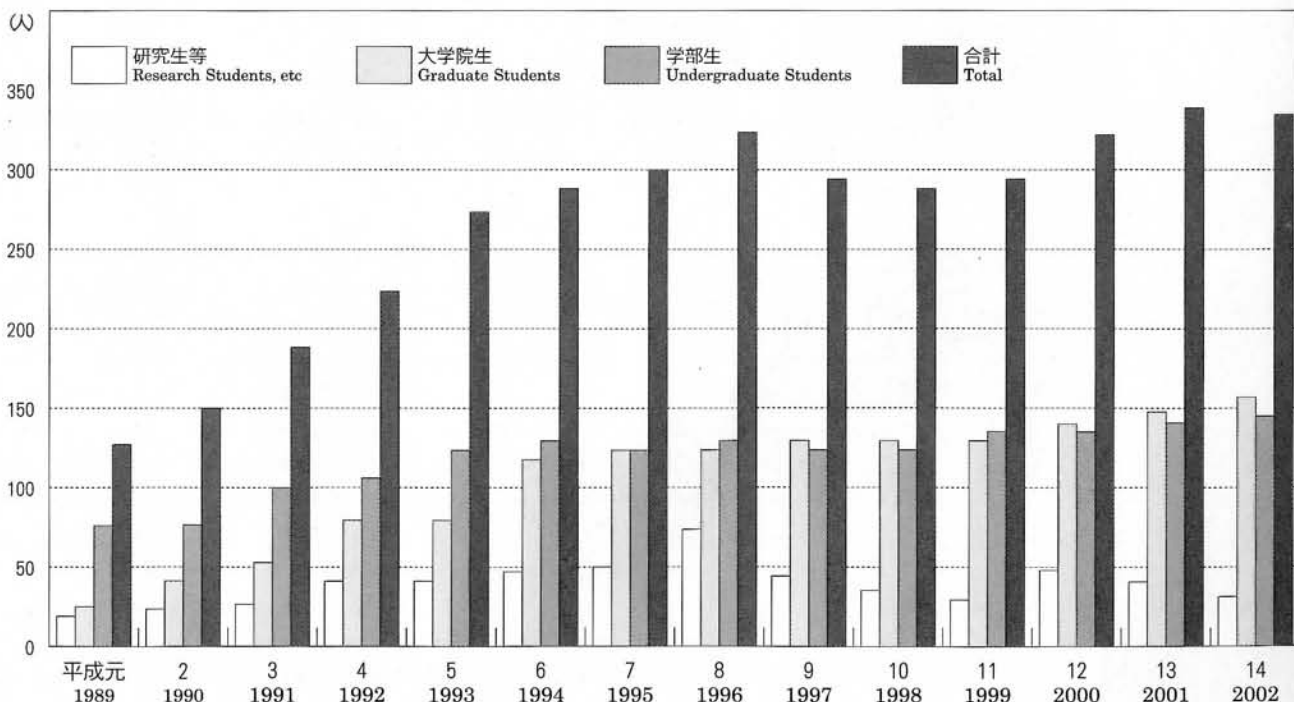


その他の国 23名
the other countries

ネパール 2名 Nepal	イラン 1名 Iran	ポルトガル 1名 Portugal
タイ 2名 Thailand	アメリカ 1名 United States of America	チェコ 1名 Czecho
エジプト 2名 Egypt	メキシコ 1名 Mexico	ハンガリー 1名 Hungary
インド 1名 India	エクアドル 1名 Ecuador	ルーマニア 1名 Rumania
ミャンマー 1名 Myanmar	ドイツ 1名 Germany	カザフスタン 1名 Kazakhstan
香港 1名 Hong Kong	フランス 1名 France	ベラルーシ 1名 Belarus
ラオス 1名 Laos	スペイン 1名 Spain	

■信州大学における外国人留学生の受入れ推移

Yearly total of International Students



■外国人留学生年度別受入れ数の推移

各年度5月1日現在

	人文学部	教育学部	経済学部	理 学 部	医 学 部	工 学 部	農 学 部	繊維学部	教 養 部 留学生センター	計
36						2		1		3
37						3		1		4
38						2		1		3
39						2		1		3
40										0
41		1								1
42		1								1
43		1					1			2
44	2									2
45	2	1								3
46		1								1
47		1								1
48		2								2
49					1	1				2
50		1						2		3
51	1	1				1	1	2		6
52		1				1				2
53		2								2
54		1			2					3
55			1	1	5	2		4		13
56		1	1	1	5	3		6		17
57	1	2	1	2	7	1	1	11		26
58			3	2	9	4	1	16		35
59		1	2		8	6	3	19		39
60	2	1	4	1	9	9	5	15		46
61	4		10	3	14	15	4	12		62
62	9	3	23	2	12	17	6	13		85
63	13	4	36	2	15	15	9	10		104
1	18	3	47	2	16	15	10	12		123
2	18	6	53	4	20	26	9	11		147
3	23	11	55	4	20	41	15	14		183
4	25	16	56	8	31	48	22	15	1	222
5	26	24	64	11	41	38	20	42	3	269
6	31	24	68	12	45	41	18	39	2	280
7	39	21	69	15	46	53	30	26		299
8	41	22	73	11	44	58	31	45		325
9	44	16	73	7	36	54	33	35		298
10	37	13	77	9	33	52	33	36		290
11	30	12	86	9	31	58	30	37		293
12	19	15	84	13	44	73	28	39	7	322
13	24	18	80	10	50	82	32	37	3	336
14	30	14	83	10	50	86	42	45	1	361

外国人留学生国別受入の推移

	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	計	
パキスタン																										2	2	2	2				8	
インド																1	1				1	1	3	1	2	5	5	5	5	3	2	1	36	
ネパール												1	1	1	1	1	1	1		1	1	1	2	2	4	3	4	3	4	4	2	41		
バングラデシュ																		2	3	5	6	11	12	12	13	13	14	13	13	14	12	13	156	
スリランカ																	1	1		1	1	1	1		2	3	1	1				13		
ミャンマー					1	1															2	2	3	5	4	3	2	3	2	2	1	1	32	
タイ									1	1	1						2	2	2	3	3	4	6	4	3	2		1	2	2	5	2	46	
マレーシア													1	2	7	8	14	19	23	30	38	44	48	52	53	52	42	36	32	29	29	31	590	
シンガポール																	1	1	1	1			1	1	1	1							8	
インドネシア										1	1	2	2			1	1	4	3	2	5	9	10	9	11	8	4	2	2	1	8	5	91	
フィリピン																		1	1	1	1					1							5	
香港																	1	2	3	3	3	2	1	1		1	1	2	2	2	2	1	1	28
韓国										1	1	3	1	1	1	2	3	7	7	11	13	14	18	19	22	18	17	24	22	28	26	34	293	
モンゴル											2	2	4	6	4	4	2					1	1	1	1	3	2	2	4	4	3	5	3	54
ベトナム																						1	2	2	2	3	3	5	6	6	8	6	6	50
中国				1						6	8	13	20	23	23	25	34	35	45	54	70	92	118	133	140	163	146	140	151	183	197	229	2,049	
カンボジア																											1	1	1	1	3	3	10	
ラオス																								1	1	1	1				1	1	6	
マカオ																				1	1	1	1	1	1	1	1						8	
台湾									1	2	2	1	3	4	6	11	16	21	26	23	23	23	19	18	17	23	28	29	26	20	18	14	374	
イラン																				1	1	2	4	4	3	2	2	2	1	3	2	1	28	
トルコ																										1							1	
イスラエル																											1	1					2	
サウジアラビア																		1	1	1	1						1	1	1	1			8	
エジプト											1	1	1								1	1			1	1	3	4	2	2	2	2	22	
マダガスカル																								1	1	1	1						4	
ケニア																										1	1	1	1	1	1		6	
タンザニア																	1	1					1	1	1	1	1	1	1				9	
ナイジェリア																					1	1	1										3	
ガーナ																						1	1	1	2	2	1	1	1				10	
ザンビア																	1																1	
モロッコ																										1							1	
オーストラリア																		1						1									2	
アメリカ合衆国																	1				2	2	2	3	2	1		2		1	1	1	1	19
カナダ																									1	1	1	1					4	
メキシコ																								1	1	1	1				1	1	6	
ブラジル	1	1	2	1	2	3	2	2	1	2	1	2	1	1	1	2	4	3	6	3	5	5	4	4	3	2	2	2	4	4	1		77	
アルゼンティン																															1		1	
チリ																							1										1	
ボリビア													1	1	1	1																	4	
ペルー																		1	1														2	
エクアドル																												1	1	1	1	1	5	
アイスランド																							1	1	1	1							4	
デンマーク																								1	1								2	
イギリス																	1	1								1							4	
オランダ																										1	1	1	1	2			6	
ドイツ																		1	2	1	1	1	1					1	1	1	2	1	13	
フランス						1															1	1	1	1	1	1	2	1		1		1	13	
オーストリア																	1																1	
ポーランド																	1				1	1							1	1			5	
チェコ																			1												1		4	
ハンガリー																											2	1			1	1	1	6
ユーゴスラビア																	1				1												2	
ルーマニア																								1	1			2	2	1	1	1	9	
カザフスタン																															1	1	2	
ブルガリア						1																				1	1						3	
スペイン																											1			1	1	1	4	
ロシア																												1					1	
バハレーン																														1			1	
ベラルーシ																														1	1	1	3	
ポルトガル																															1		1	
合計	1	1	2	2	3	6	2	2	3	13	17	26	35	39	46	62	85	104	123	147	183	222	269	280	299	325	298	290	293	322	336	361	4,198	

■交流協定締結大学一覧

大学間協定 Partnership Agreement Between Universities

平成14. 5. 1 現在
As of May 1. 2001

国名 Countries	大学名 Name of Foreign University or Institute	締結年月日 Date of Agreement
中華人民共和国 China	西南農業大学 Southwest Agricultural University Chongqing, Sishuan	昭和63年 3月23日 March 23. 1988
大韓民国 Korea	江原大学校 Kangwon National University	平成 7 年10月 1 日 October 1. 1995
アメリカ合衆国 United States of America	ユタ大学 The University of Utah	平成 8 年 3月27日 March 27. 1996
中華人民共和国 China	同済大学 Tongji University	平成 8 年 5月 1 日 May 1. 1996
インド India	インド工科大学マドラス校 Indian Institute of Technology, Madras	平成 8 年 8月28日 August 28. 1996
中華人民共和国 China	河北農業大学 Agricultural University of Hebei	平成 8 年 9月 1 日 September 1. 1996
中華人民共和国 China	河北医科大学 The Hebei Medical University	平成 8 年 9月20日 September 20. 1996
タイ国 Thailand	チェンマイ大学 Chiang Mai University	平成 8 年12月24日 December 24. 1996
中華人民共和国 China	蘭州大学 Lanzhou University	平成 9 年 9月 8 日 September 8. 1997
中華人民共和国 China	蘇州大学 Suzhou University	平成 9 年11月 4 日 November 4. 1997
中華人民共和国 China	太原理工大学 Tai Yuan University of Science & Technology	平成10年 4月15日 April 15. 1998
英国 United Kingdom	エクセター大学 The University of Exeter	平成10年 6月30日 June 30. 1998
フランス France	ラ・ロッシュェル大学 The University of La Rochelle	平成10年 9月 2 日 September 2. 1998
オーストラリア Australia	カーティン工科大学 Curtin University of Technology	平成11年 4月20日 April 20. 1999
オーストラリア Australia	オーストラリア南極研究所 Australian Antarctic Division	平成11年 8月 6 日 August 6. 1999
ポーランド共和国 Poland	ビャリストーク大学 University of Bialystok	平成11年 9月 1 日 September 1. 1999
英国 United Kingdom	マンチェスター理工科大学 University of Manchester Institute of Science & Technology	平成11年 9月10日 September 10. 1999
中華人民共和国 China	東華大学 Dong Hua University	平成11年10月 4 日 October 4. 1999
インドネシア共和国 Indonesia	プリタハラパン大学 Pelita Harapan University	平成12年 1月31日 January 31. 2000
タイ国 Thailand	カセサート大学 Kasetsart University	平成12年 3月16日 March 16. 2000
中華人民共和国 China	河南農業大学 Henan Agricultural University	平成12年 3月23日 March 23. 2000
大韓民国 Korea	尚志大学校 Sangji University	平成12年11月 1 日 November 1. 2000
ポーランド共和国 Poland	シレジア工科大学 The Silesian Technical University	平成12年12月 1 日 December 1. 2000
中華人民共和国 China	中国地質大学 China University of Geosciences	平成13年 2月15日 February 15. 2001
英国 United Kingdom	ケンブリッジ大学セント・エドモンド・コレッジ St Edmund's College, University of Cambridge	平成13年 8月21日 August 21. 2001
モンゴル国 Mongolia	モンゴル技術大学 Mongolia University of Technology	平成13年 8月27日 August 27. 2001
大韓民国 Korea	光云大学 Kwangwoon University	平成13年 9月27日 September 27. 2001
大韓民国 Korea	カトリック大学 Katholische University	平成13年10月29日 October 29. 2001
ベルギー王国 Belgium	カトリック大学ルーヴァン Katholische University Leuven	平成13年11月 6 日 November 6. 2001

学部間協定 Partnership Agreement Between Faculties

平成14. 5. 1 現在
As of May 1. 2001

国名 Countries	大学名 Name of Foreign University or Institute	対応学部 Faculty of our University	締結年月日 Date of Agreement
タイ国 Thailand	チュラロンコン大学医学部 Faculty of Medicine, Chulalongkorn University	医学部 School of Medicine	平成 2 年 9月17日 September 17. 1990
アメリカ合衆国 United States of America	ノースカロライナ州立大学繊維学部 College of Textile, North Carolina State University	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology	平成 8 年 6月 4 日 June 4. 1996
中華人民共和国 China	北京大学国際関係学院 School of International Studies in Peking University	経済学部 Faculty of Economics	平成 9 年12月24日 December 24. 1997
中華人民共和国 China	北京大学経済学院 School of Economics of Peking University	経済学部 Faculty of Economics	平成10年 2月 9 日 February 9. 1998
ドイツ Germany	マンハイム大学 Mannheim University	人文学部 Faculty of Arts	平成11年 3月11日 March 11. 1999
中華人民共和国 China	香港理工大学応用科学及紡織学部 Faculty of Applied Science and Textiles The Hong Kong Polytechnic University	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology	平成11年10月 4 日 October 4. 1999
大韓民国 Korea	嶺南大学工学部 College of Engineering Yeungnam University	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology	平成12年 9月 7 日 September 7. 2000
大韓民国 Korea	漢陽大学工学部 College of Engineering Hanyang University	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology	平成12年 9月 8 日 September 8. 2000
タイ国 Thailand	シナコリンウィロート大学理学部 Faculty of Science, Srinakharinwirot University	理学部 Faculty of Science	平成12年11月20日 November 20. 2000
ドイツ Germany	マンハイム工科大学 Fachhochschule Mannheim, University of Applied Sciences	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology	平成13年 4月18日 April 18. 2001
バングラデシュ Bangladesh	バングラデシュ農業大学 Bangladesh Agricultural University	農学部 Faculty of Agriculture	平成14年 3月 6 日 March 6. 2002

■信州大学留学生センター日本語研修コース(大学院入学前予備教育)修了生名簿

	氏 名	性別	国 名	生年月日	専門教育受入れ大学	指導教官
第5期生 (13年度後期)	李 海 波 (リ カイハ)	男	中 国	1966. 1.23	教育学研究科 (13.10～)	山崎 保寿
	張 超 (チョウ チョウ)	女	中 国	1974.12.23	医学研究科 (13.10～)	谷口俊一郎
	都 鎮 宇 (ト チンウ)	男	中 国	1973. 5.15	医学研究科 (13.10～)	鈴木 龍雄
	杜 豊 (ト ホウ)	女	中 国	1974. 3.21	医学研究科 (13.10～)	鈴木 龍雄
	閻 会 敏 (エン カイビン)	女	中 国	1968. 6.17	医学研究科 (13.10～)	管根 一男
	張 森 (チョウ ビョウ)	男	中 国	1976. 2.20	医学研究科 (13.10～)	千葉 茂俊
	任 国 山 (ニン コクサン)	男	中 国	1957. 8.16	医学研究科 (13.10～)	森泉 哲次
	DANAA BATTSENGEL (ティティク ハストゥティ)	男	モンゴル	1968. 3.28	人文科学研究科 (13.10～)	和田 敦彦
	賈 黎 静 (カ レイセイ)	女	中 国	1974. 4.24	医学研究科 (13.10～)	二階堂敏雄

	氏 名	性別	国 名	生年月日	専門教育受入れ大学	指導教官
第6期生 (14年度前期)	SEQUERIRA PAURO DAVID (セキエリラ パウロ デビット)	男	ポルトガル	1973.11. 4	工学系研究科(繊維) (14.10～)	渡邊 義見
	衛 俊 萍 (ウェイ ジュンピン)	女	中 国	1968.10.15	医学研究科 (12.10～)	二階堂敏雄
	張 合 林 (チョウ ゴウリン)	男	中 国	1966.11.24	医学研究科 (14. 4～)	二階堂敏雄
	戴 軍 (ダイ ジュン)	男	中 国	1976. 4. 1	医学研究科 (14. 4～)	管根 一男
	趙 旭 (チョウ シュイ)	女	中 国	1971. 2. 5	医学研究科 (13.10～)	佐々木克典
	李 喜 眞 (イ ヒジン)	女	韓 国	1981. 1.13	人文学部 (14. 4～)	沖 裕子
	李 賢 珠 (イ ヒョンジュ)	女	韓 国	1980. 1. 5	人文学部 (14. 4～)	沖 裕子
	李 民 慶 (イ ミンギョン)	女	韓 国	1982. 6.17	人文学部 (14. 4～)	沖 裕子
	Ganser Marion (ガンサー マリオン)	女	ドイツ	1979. 4.22	人文学部 (14. 4～)	須澤 通
	金 知 垠 (キム ジウン)	女	韓 国	1982. 4.23	人文学部 (14. 4～)	沖 裕子
	全 東 園 (ジョン ドンウォン)	男	韓 国	1970. 2. 7	人文学部 (14. 4～)	山田 健三

信州大学留学生センター教官業績一覧

年報2号からの続きの教官業績一覧です。年報2号への追加および続き業績が掲載されています。業績の種類は次のとおりです。：①著書 ②論文・研究ノート ③翻訳 ④書評・随筆 ⑤学会・研究会報告 ⑥その他

大橋 敦夫

①1995『新版文章構成法』共著35-42東海大学出版会 ②1998「中国語話者対象日本語教育の基礎知識—本学留学生と学ぶ日本語・日本語教育—」『学海(上田女子短期大学国語国文学会)第14号』85-100; 2001「日本語教育の過去・現在・未来—長野県をフィールドにして考える—」『上田女子短期大学紀要第24号』53-66 ③1994「レオン・ド・ロニー『若干の日本語辞書に関する考察(LEON DE RONS; Remarques sur quelques dictionnaires japonais) (1858年>訳解) 共著『上田女子短期大学紀要第17号』123-135 ⑤2001「日本語教室に役立つ教授法—地域の事例に学ぶ—」信州大学留学生センター主催 教育・研究シンポジウム ⑥1996「日本語教室のこれから」第1回信州日本語教室フォーラム基調講演

金子 泰子

②2001「日本語研修コース修了生の追跡調査—非漢字圏学習者のケーススタディー—」共著103-112信州大学留学生センター紀要第2号; 2002「平成12年度前期日本語研修コース修了生の追跡調査報告—言語使用状況を中心に—」共著111-120信州大学留学生センター紀要第3号; 2002「日本語初級学習者の作文研究—文のつながり方の分析を通して—」61-81信州大学留学生センター紀要第3号 ⑤2002「小論文の指導その3—二段落からの展開—」大阪教育大学第163回国語教育研究会

上條 厚

②2002「タベリ・ミリ等の長野県と東濃での分布(1) —中信地方とそれに連続する地域の優しい命令形と勧誘形—」『信州大学留学生センター紀要』3 pp.13-24; 2002「在日中国人(中国帰国者を含む)の抱える言葉の問題をめぐって」『公開シンポジウム報告書 在日外国人とのよりよき「共生」のために —言葉の問題を中心に』(長野・言語文化研究会) pp.12-19

熊崎さとみ

②1996「ブラジルにおける日本語使用の実例」『長野県ことばの会 ことばの研究 第8号』68-77; 1997「ブラジルの言語行動—「後日礼を言うこと」について日系人を中心に—」『長野県ことばの会 ことばの研究 第9号』14-24; 1998「日系ブラジル人の言語行動に関する一考察 —「断り」と「受け入れ」の場面について—」『信州大学人文学部 人文科学論集<文化コミュニケーション学科編> 第32号』37-56; 1998「言語行動に関する一考察 —「後日礼を言うこと」について日系ブラジル人を中心に—」『日本語と日本語教育—全伯および中南米日本語・日本文学・日本文化学会報告ほか—1998』76-84 ⑤1993「日本人と日系人ブラジル人の言語行動の比較」長野県ことばの会研究会(旧姓 保科にて発表); 1993「言語行動における日伯比較」国語学会(旧姓 保科にて発表); 2001「ブラジル人子弟の日本語教育における諸問題—先生方から寄せられた「現場の声」—」長野・言語文化研究会; 2002「外国人の就学で何が求められているか—ブラジル人児童・生徒の場合—」長野県ことばの会研究会 ⑥1998「ブラジルの文化と生活」塩尻市立丘中学校 国際理解

合津 美穂

【～2000年追加分】合津美穂 ⑥2000「中・上級学習者のとらえ方とその指導—日常生活からのグレードアップ—」講師 小諸市日本語ボランティア学習会; 2000「中・上級学習者向けの教材作りのヒン

トー日本事情と地域の暮らしからー」講師 小諸市日本語ボランティア学習会； 2000「日本語教育入門ー何を教えるのか？ー」講師 南信日本語ネットワーク日本語教師養成講座

【2001～2002年】②2001「日本統治時代の台湾における日本語意識ー漢族系台湾人を対象としてー」『信州大学留学生センター紀要第2号』61-77； 2001「日本語研修コース修了生の追跡調査ー非漢字圏学習者のケーススタディー」共著『信州大学留学生センター紀要第2号』103-112； 2002「漢族系台湾人高年層の日本語使用ー言語生活史調査を通じてー」『信州大学留学生センター紀要第3号』25-44；

2002「平成12年度前期日本語研修コース修了生の追跡調査報告ー言語使用状況を中心にー」共著『信州大学留学生センター紀要第3号』111-120； 2002「日本語研修コース初級クラスにおける日本語教育実習生受入れー実習を生かした教育方法の開発へ向けてー」『信大日本語教育研究第2号』信州大学人文学部冲研究室159-165 ⑤2001「リソースとしての日本語教育実習」共同発表 日本語教育方法研究会第17回研究会； 2002「漢族系台湾人高年層の日本語使用ー言語生活史調査を通じてー」2002年度東京都立大学国語国文学会 ⑥2001「日本語ボランティア研修講師を担当して」報告 信州大学留学生センター教育・研究シンポジウム『留学生センターの日本語教育と地域間の連携』ワークショップ「地域の日本語教育との連携」； 2002「学習者のニーズを捉えるためにー外国人子女を例にー」講師 小諸市日本語ボランティア学習会； 2002「プロジェクト・ワーク実践報告」共著『信州大学留学生センター年報第2号』9-13； 2002「I. 茨城県水戸市1982」編集協力『国立国語研究所資料集13-4 全国方言談話データベース日本のふるさとことば集成第4巻 茨城・栃木』国書刊行会25-116； 2002「II. 千葉県長生郡長生村1977」編集協力『国立国語研究所資料集13-5 全国方言談話データベース日本のふるさとことば集成第5巻 埼玉・千葉』国書刊行会103-230

佐藤 友則

②2002A「第3回 信州大学の留学生のニーズ調査ー2001年11・12月調査においてー」『信州大学留学生センター紀要』第3号 p95～p110； 2002B「平成12年度前期日本語研修コース修了生の追跡調査報告ー言語使用状況を中心にー」『信州大学留学生センター紀要』第3号 p111～p120 ⑥日本語ボランティア養成講座（A長野県留学生交流推進協議会主催 2001年11月 長野市； B長野県留学生交流推進協議会主催 2001年12月 松本市； C中野市中央公民館主催 2002年3月 中野市）

高石久美子

①2002『かんじ だいすき（三）～日本語をまなぶ世界の子どものために～』共著 社団法人国際日本語普及協会

中村 純子

②2001「農学系留学生の言語使用」『信州大学留学生センター紀要第2号』79-90信州大学留学生センター； 2001「日本語研修コース修了生追跡調査ー非漢字圏学習者のケーススタディー」『信州大学留学生センター紀要 第2号』103-112信州大学留学生センター； 2002「平成12年度前期日本語研修コース修了生の追跡調査報告ー言語使用状況を中心にー」『信州大学留学生センター紀要第3号』111-120信州大学留学生センター ⑤2001『上伊那方言の新しさーダラの終助詞化現象』長野・言語文化研究会 ⑥2001『農学系論文で使用される文末表現と文型ー森林経営の論文とその他の農学系論文との比較から』平成12年度信州大学留学生センター日本語研修コース・専門分野の論文読解・作文指導のための調査報告書1-36

村瀬さな子

②Sanako MURASE, Masayoshi KITABATAKE, Sumio MURASE: Lifestyle/cultural attitudes of salaried employees from large metropolitan-based companies by gender and age. Studies in Comparative Culture, 56:11-20, 2002; センター主催見学旅行へのアンケート調査結果、共著、留学

生センター紀要 3 : 133 - 143, 2002 ; ⑥NHK文化センター教養講座講師 ; 教養の医学 [1] ストレスからの解放 (松本放送会館教室)

村田 明

②2002「観察形」『信州大学留学生センター紀要 3』1-10

山本もと子

②Sociocultural Dimensions in Apology 平成14年度信州大学大学院人文科学研究科修士論文 ; 2002 Apologizing in English and Japanese 『信州大学留学生センター紀要 第3号』121-132

編 集 後 記

編集を終えた年報の各項目見出しを見ると、国立大学留学センターの典型的な活動内容だなと感じます。独法化に向けて信州大学ならではの留学生センター造りを心がけなければいけないのですが、願わくは、ここに報告されている活動を反省的に発展させるように進化させることができれば、そしてその際に、この活動記録が単なる思い出の集成ではなく、反省の起爆剤になればと思います。

最後に、年報原稿依頼に快く応じてくださり正確な活動報告をしてくださった留学生センターの皆様にお礼申し上げます。

信州大学留学生センター年報 第3号

編集担当者 村田 明・佐藤友則

平成15年3月 発行

発 行 所 信州大学留学生センター

〒390-8621 松本市旭3-1-1

TEL (0263)37-2185

FAX (0263)37-2181

<http://isc.shinshu-u.ac.jp>